

日本スポーツ社会学会会報

第14号

Sport
ociology

日本スポーツ社会学会

Japan Society of Sport Sociology

事務局：九州大学 1996.6.10

スポーツ・レジャー社会学 オールターナティブの現在

デービッド・ジェリー／ジョン・ホーン

清野正義／山下高行／橋本純一 編著／A 5 版 334頁、定価2900円

—今日、私たちの生活のなかで、スポーツやレジャーの占める比重が圧倒的に高まってきている。生活世界におけるスポーツ・レジャーの位置や意味を多方面から分析し理論構築を図ることは、日本はもとより、世界的にもみて社会学上の課題となっている。それは、多様な意味と重層的構造を持つに至っている現代社会におけるスポーツ・レジャーの分析のために、より一層深められた理論ツールを持つ必要が生じてきているからに他ならない。

本著での私たちの試みもこのような流れのなかに位置している。イギリスの気鋭の社会学者、デービッド・ジェリー、ジョン・ホーン両教授を迎え、日英の研究者によるイギリス、フランスを中心としたヨーロッパの理論社会学の批判的検討という共同作業を通じて、スポーツ・レジャーに関する分析の深まりと理論構築の新たな展開をめざしたものである。

(「編者あとがき」より)

【主目次】

- 序章 イギリス・スポーツ・レジャー社会学と日本の研究／山下高行・清野正義
- I プリティッシュ・カルチュラル・スタディーズとスポーツ・レジャー研究／ジョン・ホーン
- II ヘゲモニー論とスポーツ社会学研究
 - 1 「スポーツとヘゲモニー」論の地平／橋本純一
 - 2 ポスト・フォーティズムのもとでのスポーツ・レジャー／山下高行
- III ピエール・ブルデューとフランス・スポーツ社会学
 - 1 ブルデュー社会学とフランス・スポーツの研究／三浦弘次
 - 2 ブルデュー社会学とスポーツ研究の可能性／棚山 研
- IV スポーツとレジャー研究におけるフィギュアレーション社会学再論
／デービット・ジェリー&ジョン・ホーン
- V 「企業社会」日本のレジャーとスポーツ／川口晋一
- VI 労働時間、スポーツ、空間／清野正義
- 終章 スポーツ・レジャー社会学における理論および方法論の新たな方向性
／デービッド・ジェリー&ジョン・ホーン

増補改訂版

体育・スポーツ事故判例の研究 A 5 版368頁3800円

東京女子体育大学教授 伊藤 堯 著
佐藤栄学園 国際教育局部長 佐藤 孝 司 著

1996 スポーツ六法 伊藤 堯 編 山田良樹

新訂版 B 6 判 価2900円

健康科学 健康科学研究会編

B 5 判／209頁／定価2500円

図表 400 以上・見開き(図、表：説明)対称ページで見安く成って折ます。

〒 171 東京都豊島区高松 2-8-6 道 和 書 院 TEL (03)3955-5175
FAX (03)3955-5102

目次

《理事会・総会報告》・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

《お知らせ》・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

- 1. 編集委員会より
- 2. 事務局より

《日本スポーツ社会学会第5回大会報告》・・・・・・・・・・ 9

- 1. シンポジウム
- 2. 公開フォーラム
- 3. キーノートスピーチ
- 4. 一般発表
- 5. 大会運営担当者からの一言
- 6. 第5回学会大会参加記

《研究通信》・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

「アトランタ五輪まであと〇〇日」！
「タッチ3」を見て泣けますか
競技スポーツ？生涯スポーツ？

《会員の出版物紹介》・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

《編集後記》・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

理事会・総会報告

第Ⅲ期 第3回理事会報告

日時：1996年3月28日（於、宮城教育大学）

参加理事：池井 望（会長）、宮内孝知（理事長）、平野秀秋、伊藤公雄、菊 幸一、山下高行、生沼芳弘、松村和則、近藤義忠（監事）、山本教人（事務局長代理）、吉田 毅（事務局会計）

議題：総会議案について

1. 報告事項

a. 理事会報告

第Ⅲ期 第2回理事会の審議内容の確認

b. 編集委員会報告

機関誌『スポーツ社会学研究第4巻』の編集、および市販化について

c. 研究委員会報告

1. 研究会議の開催

・第1回 1995年7月8日 於、京都タワーホテル

1) シンポジウムのテーマについて

2) 科研の申請について

・第2回 1995年10月29日 於、京都タワーホテル

1) 96年度国際シンポジウム予備折衝の結果と対応について

2) 文部省国際研究集会の申請について

3) 科研の申請について

4) 95年度学会シンポジウムの内容について

2. 国際シンポジウム開催のための準備事業

・英・仏国への予備折衝（山下・菊）1995年9月23日～10月2日

・文部省国際研究集会の申請

・文部省科学研究費（総合B）の申請

3. 日本スポーツ社会学会第5回大会シンポジウムの開催（予定）

・期日：1996年3月29日 於、宮城教育大学

・司会：伊藤公雄、上杉正幸

・演者：山下高行、菊 幸一、吉見俊哉（非会員）

d. 事務局報告

1. 活動報告

・会報第11号（平成7年7月）、12号（平成7年11月）、13号（平成8年3月）の発行

2. 事業計画

・会報第14、15、16号の発行

・会員名簿の作成

・理事の選挙

2. 審議事項

- a. 平成7年度編集委員会決算報告
 - ・平野編集委員長より平成7年度の編集委員会決算報告がなされ、承認された。
- b. 平成7年度決算報告
 - ・吉田会計担当より平成7年度決算報告がなされた。続いて、近藤監事より監査報告がなされ、これを承認した。
- c. 平成8年度予算案
 - ・吉田会計担当より平成8年度予算案が提示され、審議の結果これを承認した。
- d. 第6回大会開催地について
 - ・立命館大学での開催を承認した。

第5回日本スポーツ社会学会総会報告

平成8年3月28日 於、宮城教育大学

進行 (理事長)

- 1. 会長挨拶
- 2. 議長選出
- 3. 議事

(1) 報告事項

- a. 理事会報告
- b. 編集委員会報告.....資料①参照
- c. 研究委員会報告
- d. 事務局報告

(2) 審議事項

- a. 平成7年度決算.....資料②参照
- b. 平成8年度予算.....資料③参照
- c. 第6回学会大会開催案

- 4. 理事挨拶
- 5. 閉会

資料①：編集委員会報告

平成7年度 編集委員会決算報告

	今年度 (第4巻)	前年度 (第3巻)
1. 収入の部		
学会より	700,000 円	700,000 円
前年度より繰越	123,616 円	26,886 円
頁超過分実費	—	35,000 円
計	823,616 円	761,886 円
2. 支出の部		
印刷費	714,976 円	515,000 円
会議費	6,674 円	46,471 円
通信費	27,700 円	42,805 円
交通費	66,080 円	24,960 円
事務費	1,267 円	4,034 円
謝金	—	5,000 円
小計	816,697 円	638,270 円
次年度へ繰越	6,919 円	123,616 円
計	823,616 円	761,886 円

資料②：平成7年度決算

平成7年度決算

平成7年度予算書

1: 収入の部	1,483,477 円
2: 支出の部	1,483,477 円
3: 差引残高	0 円

平成7年度決算書 (3月22日決算)

1: 収入の部	1,621,090 円
2: 支出の部	1,296,276 円
3: 差引残高	324,814 円

1 収入の部

項目	金額	備考
繰越金	233,477	前年度繰越金
会費	1,100,000	
その他	150,000	広告費他
合計	1,483,477	

1 収入の部

項目	金額	備考
繰越金	233,477	前年度繰越金
会費	1,258,200	
学会誌売上	34,700	
雑収入	94,713	利息、広告費
合計	1,621,090	

2 支出の部

項目	金額	備考
学会誌関係	700,000	印刷代、編集費
学会だより	120,000	印刷代
通信事務費	180,000	切手、葉書、郵送費
理事会経費	220,000	交通費補助、研究力外経費
事務局作業補助	80,000	作業手伝い、事務用品他
学会大会補助	50,000	第5回大会事務局への補助
その他	15,000	振込手数料他
予備費	118,477	
合計	1,483,477	

2 支出の部

項目	金額	備考
学会誌関係	700,000	印刷代、編集費
学会会報	111,240	印刷代
通信事務費	184,740	切手、葉書、郵送費
理事会経費	136,760	交通費補助、研究力外経費
事務局作業補助	71,147	作業手伝い、事務用品他
学会大会補助	50,000	第5回大会事務局への補助
その他	10,881	振込手数料他
雑費	31,518	形費
合計	1,296,276	

上記の決算書を監査の結果
適正に処理していることを証明します
平成8年3月23日

監査 近藤 義弘
近藤 義弘

資料③：平成8年度予算

平成8年度予算書

- 1：収入の部
2：支出の部
3：差引残高

1 収入の部

項目	金額	備考
繰越金	324,814	前年度繰越金
会費	1,100,000	
その他	120,000	広告費他
合計	1,544,814	

2 支出の部

項目	金額	備考
学会誌関係	700,000	印刷代、編集費
学会会報	120,000	印刷代
通信事務費	200,000	切手、葉書、郵送費(会報他)
理事会経費	220,000	交通費補助、研究加外経費
事務局作業補助	80,000	作業手伝い、事務用品他
学会大会補助	50,000	第6回大会事務局への補助
その他	50,000	名簿印刷代、振込手数料他
予備費	124,814	
合計	1,544,814	

お知らせ

1. 編集委員会より

『スポーツ社会学研究』にかんするお知らせとお願い

編集委員会から、機関誌『スポーツ社会学研究』にかんするお知らせとお願いをいたします。
第1部から第4部まであります。いずれも重要なのでぜひお目通しください。

第1部 『スポーツ社会学研究』をご推薦ください

ご存じの通り、『スポーツ社会学研究』は第4巻から書店等で購入できることになりました。本学会会員の研究成果がより広く公開される機会です。ぜひつぎのような方面に向けてご推薦ください、継続購入がなされるようお願いいたします。

1. 貴会員の所属される大学・研究機関の図書館
2. 貴会員の関係される公共図書館
3. その他われわれの研究領域に関心のある組織や個人

購入方法は、書店に注文されるのがもっとも便利です。

また、会員がまとめて購入される場合は価格の80%です。詳細は機関誌奥付所掲の発売所に問い合わせてください。

第2部 第5巻への論文等投稿のご案内

『スポーツ社会学研究』第5巻への論文、研究ノート、書評の原稿を、例年通りつぎの要領で行います。

- 1) 投稿予約締切日：来る7月20日まで。
予約は、葉書またはE-mailでお願いします。
- 2) 原稿の締切り日：来る8月20日まで。
原稿の要件は、機関誌巻末の「機関誌の発行に関する規定」に記されています。それぞれの「執筆要項」を遵守して執筆の上、郵送してください。
- 3) 上記の予約、投稿とも、期日を厳守の上、下記の宛先にお送りください。

宛先：〒254 東京都町田市相原町4342
法政大学社会学部 平野秀秋研究室内
日本スポーツ社会学会編集委員会
E-mail: hhirano@mt.tama.hosei.ac.jp

第3部 機関誌に関する規定の運用について

編集委員会は、機関誌『スポーツ社会学研究』に関する規定の運用につき、あらためて下記のように再確認しました。

機関誌への執筆・投稿にあたってご参考くださいますよう、会員各位にあらかじめ公開いたします。

1. 「編集規定」に所定のジャンルは次の通りです：同規定第5条「本誌は、論文、研究ノート、書評、業績リスト、その他から構成されます」。
2. このうち「業績リスト」は編集委員会が会員各位にたいし報告していただく事項について照会を行い、また「その他」は編集委員会においてその都度合議決定します。
そこで、会員から投稿していただく原稿のジャンルは、特別寄稿、一般寄稿を問わず原則として最初の三つです。
3. 論文、研究ノート、書評の三ジャンルについては、それぞれの定義と要件とが同規定を含む『機関誌に関する規定』全体において与えられています。
投稿にあたってはそれらを充分ご参照ください。
4. 投稿の際には、どのジャンルへの原稿であるかを、かならず明記してくださるようお願いいたします。
編集委員会はそのお申し出に従い処理をします。本人からの申し出によらずジャンルを変更することはいたしません。
5. 専門委員に委嘱された会員は、投稿会員本人の申し出られたジャンルの別にもとづいて掲載の可否の判断を行ってくださるようお願いいたします。
とくに、他のジャンルに変更するようという専門委員の意見には編集委員会は対応することが出来ませんので、どうぞ充分ご注意ください。
6. 査読にあたっては投稿会員の氏名は、専門委員にたいしても一切公開されません。
また査読専門委員の判定は、理由書とともに専門委員名を伏せて逐一投稿会員に還元されます。
これはあらためていうまでもない査読制度の常識ですが、学会活動に経験の浅い若い会員の入会が毎年続いていますので、参考のためあらためて申し添えます。
7. 査読の公正を期すために、万一査読結果にたいする異議がある場合には編集委員会は正規の議題としてその処理にあたります。そのような場合は公開を前提とした文書によってお申し出ください。

第4部 掲載用原稿のフロッピー（FD）入稿について

第5巻以降、経費節約と編集作業の迅速化のため、掲載の決定した原稿はフロッピーで入稿していただくことを原則とさせていただくことを編集委員会は決定いたしました。

原稿がその段階にある会員諸氏は、今後下記の『入稿要領』を十分ご参考の上原稿を提出して下さるようお願いいたします。

なお、パソコン、ワープロ、タイプライター等一切使用せず、今後とも手書き文字の伝統を貫く主義の方にかぎり、その信条を尊重し『入稿要領』の例外とします。

『入稿要領』

§1 最初に

以下の記述では、パソコン上でワープロ・アプリケーションソフトを使用される方を「パソコンの方」、ワープロ専用機を使用される方を「ワープロ機の方」と記載します。

§2 ラベルを必ず記入して下さい

- 1) 「パソコンの方」は、FDのラベルに標準テキストファイルとして保存された上で、使用された機種（MS-DOS、Macintosh）の別を記入して下さい。
また「保存テキストファイル名」も記入して下さい。
- 2) 「ワープロ機の方」は、ラベルにご使用になったワープロ専用機の機種名を記入して下さい。

注：最近のワープロ専用機には、MS-DOSフォーマットを施したFDにたいし標準テキストファイルとして保存する機能を持った機種もあります。

確実に標準テキストファイルであることに確信が持てる場合のみ、「パソコンの方」に準じていただいで結構です。

ただしその場合にも念のため、機種名を書き添えて下さい。

§3 FDのフォーマットについて

- 1) 「パソコンの方」
MS-DOS、Macintoshどちらも1.44MB（2HD）、または720KB（2DD）フォーマットのFDを使用して下さい。
- 2) 「ワープロ機の方」
お使いのワープロ専用機のフォーマットに従って下さい。

§4 原稿本文について

原稿本文の保存には、つぎのファイル形式を使用して下さい。欧文も同じです。

- 1) 「パソコンの方」
標準テキストファイル（Plain ASCII Text File）形式。
- 2) 「ワープロ機の方」
従来通りその機種固有のファイル形式。

§5 『表』と『図』について

これらについては、印刷所でそのまま通用するデファクト・スタンダードがありません。にもかかわらず、「表」や「図」の版下作成は一般に本文より高額です。

そこで、提出される原稿に添付された「表」や「図」を出来るかぎりそのまま、または縮小処理して、版下に使用させていただきます。

そのことをお含みの上、どうぞできるかぎり鮮明に印刷されたものをご提出下さい。

§6 FDは返還を保証できません

勝手ながら、上記のFDは事故等のためお返しできないことがあります。原稿以外の情報を含めよう、ご注意ください。

2. 事務局より

1. 事務局の構成等について

4月より事務局に新メンバー（西村秀樹会員）が加わったこともあり、今年度は気分を一新して、以下のような役割分担で学会のお手伝いをしていこうと考えております。本年度も、各種委員会へのお尋ねや投稿の依頼等で、会員の皆様方にご迷惑をおかけすることがあるかと思いますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

事務局長：三本正敏（福岡教育大学）電話：0940-35-1458 ファックス：0940-35-1709
E-mail: sanbonma@fukuoka-edu.ac.jp
研究担当：西村秀樹（九州大学）電話/ファックス：092-583-7847
庶務担当：山本教人（九州大学）電話/ファックス：092-583-7855
E-mail: yamamoto@ihs.kyushu-u.ac.jp
GHE00164@niftyserve.or.jp
会計担当：吉田 毅（九州大学）電話/ファックス：092-583-7856
渉外担当：松尾哲矢（福岡大学）電話：092-871-6631 ファックス：092-865-6029
E-mail: gg035538@jsat.fukuoka-u.ac.jp

なお、前号でもお知らせいたしましたが、ダイヤルイン化に伴い、4月より事務局の電話番号が変更となりました。以前の電話番号では通じませんのでご注意ください。

2. 『スポーツ社会学研究』バックナンバーの販売について

『スポーツ社会学研究』のバックナンバーを販売しております。ご購入の方は事務局までご連絡ください。各巻の価格は下記の通りです。なお、第1巻につきましては在庫がありません。また、編集委員会からのお知らせにもありますように、第4巻は市販されておりますので、書店か出版社に直接お申し込みください。

2巻：2,300円 3巻：2,000円

3. 会員名簿について

学会の会員名簿については、作成されてからかなり時間が経過していることもあり、更新の必要性が指摘されておりました。事務局では、お申し出のあった会員の記載事項の変更と、E-mailのアドレス等の追加記載を行ってまいりましたが、この度、ようやくその作業を終えることができましたのでお届けします。

なお、ミスのないよう最大限の努力は払いましたが、記載内容に間違いがある場合、事務局までご報告くださいますようお願いいたします。

日本スポーツ社会学会第5回大会報告

1. シンポジウム

スポーツ社会学の理論的可能性を探る —その 1：身体/Bodyをめぐる—

報告1：カルチュラル・スタディーズと身体/Body 山下高行（立命館大学）

報告2：エリアス派スポーツ社会学と身体/Body 菊 幸一（奈良女子大学）

報告3：わが国のスポーツと身体/Body 吉見俊哉（東京大学）

司会 伊藤公雄（大阪大学）

今回のシンポジウムは、周知のように、「スポーツ社会学の理論的可能性を探る」という企画の第一弾として開催されました。この企画は、来年度の大会時に開催を計画している国際シンポジウムへと継承され、企画全体を通して、現時点でのスポーツ社会学の理論的パースペクティブを総合的に議論することを目的とするものです。今回のシンポジウムにおいては、現在、スポーツ社会学の領域で激しい論争を展開しているブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズ派とエリアス派のスポーツ社会学（来年度の国際シンポジウムの参加予定者には、いずれかのパースペクティブの影響を受けている研究者が多い）について、その基本的視座を会員諸氏と共有し、それを近代日本のスポーツ社会学研究と結び付けるということを主眼として企画されました。

シンポジウムでは、冒頭、以上のような趣旨を司会の伊藤が述べた後、ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズの視点から山下高行氏が、続いて、エリアス派スポーツ社会学について菊幸一氏が、それぞれ、これらの潮流の基本的視点について報告されました。続いて、吉見俊哉氏が、近代日本のスポーツをめぐる、特に運動会を軸に報告されました（今回のシンポジウムの詳細については、次回の学会誌において、報告者による短い論文と司会の伊藤の解説を掲載する予定ですので、ここではふれません）。休憩の後の相互討論や質問を通して、さまざまな意見が戦わされました。山下氏と菊氏には「中学生にもわかるレベルで報告を短時間でまとめてほしい」といった辛辣な意見が出される一方、逆に、このテーマについてかなり高度なつこんだ質問とその応酬も行われました。

司会として個人的な意見を言わせてもらおうと、今回のシンポジウムは、スポーツ社会学の理論研究としては、かなり水準の高い、また、刺激的なものとなったように思います。ただし、ヘゲモニー論や文化研究といった、今回のテーマに近いところでこれまで研究を続けている司会者が、内容の面白さに個人的にすっかり「乗って」しまい、きちんと交通整理をするという任務を十分果たせなかったのではないかと、という思いもあります。その結果、こうした分野について予備知識をおもちの参加者と、これまでこうしたテーマについてふれてこられなかった参加者との間で、いささか受け止め方にギャップを生じさせてしまったのではないかと危惧しています。すべて、司会者の至らぬところであり、お許し願いたいと思います。

今回のシンポジウムをうけて、来年度、京都で開催される予定の国際シンポジウムも、研究委員会を軸に、すでに着々と準備が進んでいます。この場をおかりして、来年の国際シンポジウムにつ

いてもご報告しておきたいと思います。現時点では、今回のシンポジウムでもとりあげたエリアス派からはダニング（英国、レスター大学）、プリティッシュ・カルチュラル・スタディーズの側からはトムリンソン（英国、ブライトン大学）の参加が予定されています。さらに、フランスからはポシェロ（パリ11大学／スポーツ文化研究所所長）とドゥ・フランス（同大）、デンマークからアイヒベルク等、スポーツ社会学の重鎮や若手研究者の名前があがっています。また、韓国の複数の研究者の参加も準備中です。また、他の地域を中心に数名の参加者（特に、ドイツおよび北米等）の研究者の名前もあがっています（「こんな研究者は呼べないか」というご意見があれば、ただちに検討させていただきますので研究委員会の方にご連絡ください）。

現時点では、全体シンポジウムとともに、変化の渦中にある各国のスポーツ文化をめぐる「現代社会の変容とスポーツ文化」というワークショップと、「スポーツと権力」という、より理論的なフレームを対象にしたワークショップなどを企画中です。会員諸氏のご意見をうかがいたいと思います。

ただし、経費についてはいまだ十分な準備ができていません。各種の基金や団体の後援等を模索していますが、会員諸氏のご協力をぜひともあおがなければなりません。また、せっかく日本にこられる各国の研究者を、学会主催のシンポジウム以外の場で「活用」していただくことも大切なことだと思います。各研究機関などで、この機会に講演会やシンポジウムなどを企画していただくと一研究機関での経済的支授が可能であればさらに一幸いです（希望される会員は、研究委員会の方にご連絡ください）。

2. 公開フォーラム

「J」の風：地域スポーツを変えられるか」について

中島信博（東北大学）

学会大会を開催する地元が中心となってフォーラムを企画する際、いくつかの思いがこめられていたように思う。まずは地元らしさを出したいというのがひとつ。東北ないしは仙台ではどうか、全国に知らせてみたいという思いである。そして会員以外にも公開する形をとって、研究者内部の議論に終わらせたくないという気持ちもあった。そのためには、なるべく現在起こっている身近な問題を取り上げてみたかった。こうした背景からさしあたりサッカーのJリーグ現象に注目し、非会員をパネラーに招いて多角的に論議をする形に落ち着いていった。「地域」という核を打ち出したのは、Jリーグの理念のなかでもそれが重要な位置を占めており、現実にはいろいろな事態が地域で進行しているのを受けて、新たな論議が必要という認識からであった。

全体を大まかに3部に分けて構成してみたので、以下ではその概要をまとめてみたい。

第1部では、お二人のパネラーから東北地方ないし仙台圏のスポーツ事情を報告して頂くこととした。まずは東北通産局の遠藤憲子氏にお願いをして、主としてブランメル仙台という、Jリーグを目指すプロ・サッカー・チームの設立経緯を紹介して頂いた。設立にいたる紆余曲折のなかに、東北ないしは日本の状況を読み解くヒントが多く折り込まれていたように思う。「東北にもJリーグチームを」という住民の願望、地場企業のない仙台の弱体な経済事情、頼りとした企業の側がか

かえていた限界性などの狭間で、興味深いうごめきと幾度かの転換が経験された。

現場からの報告の二番手として、塩釜フットボールクラブの小幡忠義氏に登場して頂いた。先のブランメルがいわば誘致型あるいはトップ・ダウン型の運動だとすれば、スポーツ少年団から出発して社団法人へと展開した氏の運動は、ボトム・アップ型と類型化できると思われる。実践家らしい熱気にあふれた語りのなかに、これまた多彩な問題が散りばめられていた。Jリーグ開幕時に、川淵チェアマンの理念から氏は大きな影響を受け、またドイツのクラブ・システムを視察してカルチャー・ショックを受ける。そこから次第に企業依存型でない、市民中心のクラブづくりの実践へと進む。公益法人へとたどり着いていく歩みそのものが、日本のスポーツ・システムないしは社会システムとの格闘であったといえよう。そして当該システムのもつ特異性が、多方面から浮かび上がってきたのではなからうか。

以上のような現状報告を下敷きに、第2部では文部省の石川晋氏と、会員で東京大学大学院の高橋義雄氏から報告を頂いた。

石川氏はまず日本のスポーツについてその歴史認識を披瀝され、「学校・会社型のスポーツ体制」と、「日本のアマチュアリズム」の特徴を指摘された。Jリーグについては、それがこれまでの野球などの競技とは違った理念を掲げているがゆえに、行政として支援できる可能性もあるという立場を表明された。また氏なりのクラブ・スポーツのイメージも提示されるなかで、ソフト面での財源確保（たとえばサッカー籤）も強調された。スポーツ行政の当事者がどのように現状を認識し、政策のポイントをどこに置いているかがうかがわれて興味深かったのではなからうか。

高橋氏は現状認識に関連して、スポーツがやっと地域に開かれてきたという捉え方だった。Jリーグ・チームを地方でも持てるという期待を市民に抱かせた点が新しい意義であると指摘する。また、情報、あるいはメディアについても氏は深い関心を持っていて、競技団体が戦略的に付加価値を生む努力にも言及した。

紙数が尽きたので第3部のフロアとのやりとりを紹介できないのは残念である。発言の多くはやはり行政の施策と住民の自主性との関係をめぐるものであったように思う。Jの風が吹いて、スポーツ・クラブあるいは社団法人などの動きが出現してきたなかで、今後ますますこの基本的問題を考えることの意義が深まると予想される。

3. キーノートスピーチ

「中国における体育・スポーツ社会学研究の歴史的使命について」

北京体育大学 蘆 元鎮教授

<はじめに>

中国における学校体育およびスポーツ状況と、スポーツ社会学研究の一端については昨年の大会における劉 紹曾教授（北京体育大学）の講演（会報11号および『スポーツ社会学研究』Vol.4参照）でも報告された。また、これまでも何人かの研究者（たとえば天津体育学院の牛 興華教授）が来日し、各地で交流をしておられる。しかし、まとまった形で中国における体育・スポーツ（中国ではスポーツという言葉を示すような、日本語における外来語表記の「カナ」文字がないので「体育」もしくは「運動」などが随意用いられる。したがって、本論においても同様）社会学研

究について紹介されたのはおそらく今回が初めてであろう。くわしくは次の『スポーツ社会学研究』(Vol. 5)に掲載される予定なのでここでは簡単に概要を記すことにしたい。

< 蘆 元鎮教授の紹介 >

現職は、北京体育大学のオリンピック・体育社会科学研究室教授であり、体育社会科学研究センター副主任を兼ねている。中国における学会活動としては中国社会学会体育社会学専門委員会副主任と中国体育科学会体育社会学組長をしている。主要業績としては『体育百科辞典』の編集副主任、さらに中国の大衆スポーツの計画で名高い『全民健身計画』に参画し、『全民健身計画綱要』を編集されている。著書には『体育社会学教程』(高等教育出版社, 1995) 他、論文も数多くある。

< 報告の要旨 >

1. 中国における体育・スポーツ社会学研究の歴史

国際的視点で見れば中国の体育・スポーツ社会学研究はかなり立ち遅れている。その理由の一つは親学問である社会学が中国では長期間強制的に否定されたからであり、体育は基本的には教育学を基盤としていたからである。しかし、1980年代に入って競技スポーツ・群衆体育の急激な発展と共に体育社会学的研究の必要性が高まった。

1989年以降、相次いで「体育社会学」をタイトルにした教科書や専門書が出版された。北京その他の体育学院では体育社会学の講座(研究室)ができ、北京体育大学においても修士課程が設けられた。中国体育科学学会では3回の体育社会学の学術研究討論会を開催し、『中国大百科全書』(社会学編)にも「体育社会学」を専門用語として載せている。また中国社会学会でも体育社会学分会(委員会)が成立した。

2. 中国における体育・スポーツ社会学の基本的特徴

中国の知職人は特殊な階層であり、とくに「政治に参画する」という意識を持っており、歴史的使命意識が強い。中国における体育・スポーツ社会学の形成・発展期は、中国社会の激烈な変革期と一致しており、計画経済から市場経済への転換、単一的な中央集権的統制から多元的な民主主義型への進歩、「挙国体制」的スポーツから多様なスポーツ経営・投資への変換へと進んでいる。人々の生活様式も著しい変化をとげ、サラリーマン層が急速に増加し、農村人口が大量に都市へ移動し、余暇時間の増大、生活空間の拡大、生活のリズムの加速、消費制度の優先等、社会全体の中の体育・スポーツの役割が拡大していく社会的条件ができてきた。

体育・スポーツをめぐる社会問題も増え、団体・個人間でも利益の分配に矛盾が生じている。ドーピング、スポーツにおける暴力、女性スポーツ、老人スポーツなどの研究課題も出てきた。1983年から1991年にかけての体育・スポーツに関する社会科学研究は54種1,416編の文献(呉玉芳)があるが、その内社会学的論文は211編である。

実務を重んずる文化的伝統が中国にはあるが、中国における体育・スポーツ社会学の社会調査の特徴にもそれが現われている。簡単に特徴を示すと、①社会体育・スポーツと体育・スポーツ改革の課題に関するものもとても多い。②社会調査法は政府の体育・スポーツ部門で重視された。③アンケート調査法が主であるが、まだ始まったばかりであり、調査法は不十分であるため調査データの相互の比較がむずかしい。④人口が多く標本数も大きくなるため全国レベルでの調査では膨大な作業量になる。⑤未だに全国的な調査のネットワークはできず、それぞれの形式で調査が行われている。

結論的には、未だ中国における体育・スポーツ社会学は学問としての枠組みが明確ではなく、体育概論、体育管理学、体育経済学、体育法学、体育倫理学、体育哲学、体育美学、比較体育学など

の社会科学研究も同時に着手したばかりであり、①社会学の理論構造を枠組みにして体育・スポーツの例を引いて説明する。②体育史と体育概論の概念に基づき、社会との関わりのある内容を増やす。③外国の体育・スポーツ社会学研究を基にして、体育管理学、体育哲学、体育文化学と交わることが頻繁であり、とくに90年代に入ってからではスポーツ社会学と体育経済学との共同による体育・スポーツ現象の探求が目立つ。

中国における体育・スポーツ社会学研究の各領域の進展状況を見ると、(1)社会体育分野では、体育・スポーツとライフ・スタイルの関係について、コミュニティ・スポーツについて、全民健身計画の研究が中心であり、(2)競技スポーツ分野では、競技スポーツの役割の開発、競技スポーツにおける歪み(変質)現象、(3)学校体育では、社会化の役割、学生のスポーツ集団(グループ)研究、(4)体育・スポーツ文化では、娯楽理論研究、体育・スポーツとマスコミの関係、民族体育・スポーツ文化の研究が行われつつある。

これまで我が国では50年代から旧ソ連をモデルにして体育・スポーツ制度をつくってきたが、これは計画経済・集権的政治体制に適応していた。しかし、市場経済への変化、世界各国との交流拡大等によって旧来の体育・スポーツ制度では問題も多く、体育・スポーツ改革の課題が重要となってきた。たとえば、競技スポーツと学校体育、大衆スポーツ間の協力関係、経済・文化、健康・娯楽・レジャー・社交等の多様な目的、政府機関以外でのスポーツ事業の展開、スポーツ団体、企業・大学等でのチームなど、今後益々体育・スポーツ社会学研究の必要性が高まってきているといえよう。

(文責：日本体育大学 森川貞夫)

「現代スポーツ理解へのオルタナティブ：英国文化研究を超えて」

ジェイ・R・マンドル(コルゲート大学・経済学教授)

ジョン・D・マンドル(コルゲート大学・女性学研究所長)

この表題は、彼らへ講演の依頼をする際に2~3分電話で話した内容から筆者が独断で付けたものでした。しかし、講演の内容から解釈すればこのままで良かったように思います。原題はUnderstanding Contemporary Sportsです。

さて、報告は、まえがき、左翼理論とスポーツ、パフォーマンス・アートとしてのスポーツ、の3部門で構成されていました。まず、彼らのスタンスを次の様に明示しています。「競技者への左翼理論家の関心は、批判的立場に根差した資本主義と資本主義社会の中における根本的な社会変革への関わり方にあった。彼らは、社会の中でスポーツがいかに機能していたかを知らうとし、資本主義を克服する努力が成功裏に終わる領域としてスポーツをどう考えるかに関心があった。

我々は、スポーツの中身を検証し、その影響と魅力の元を探ってみたい。スポーツをうす汚れた活動としてみたり、また資本主義を擁護、さもなくば変革したりしようとする人々を引き入れる政治の場としてみたりするより、我々はスポーツをそれ自身の中に重要性和積極性をみい出すものだと考えたい。スポーツは確かに政治性を内包している。何故なら、スポーツは基本的な生活問題(life issues)をまざまざとみせてくれるから。しかし、私たちは、スポーツは文字どおりの意味で一つの文化形式(cultural form)なのであり、それが広い意味の政治の中で道具的な価値をもつものではないと考える。」

グラムシのヘゲモニー論を継承する英国バーミンガム現代文化研究センターに纏わる研究者（J・ハーグリーヴス、W・J・モーガン、C・ラッシュ）の仕事に批判して、スポーツを階級闘争の場としてみる具体的な根拠はないのだと言います。また、スポーツの商業化、TVや大衆市場が求めるものによってスポーツが外部から大きな影響を受け、腐敗・汚染される（corruption）という仮説は、裏付けられないものであると結論します。

「彼らは、（プロスポーツの）オーナー・商社マンの活動、さらに資本家的価値の影響でスポーツが大きく変質してしまっていることをみる。しかし、スポーツのこうした否定的評価の中に見落している点は、合衆国のみならず世界中でスポーツがもつ民衆への強い影響を説明していない」点をどう考えたら良いのか、と改めて問題提起します。

「スポーツの魅力は、基本的な人生のテーマがより鮮明にドラマティックに現われる、いうならば、文化形式(cultural form)であるという点に有ると思う。このスポーツの中身の分析は、人間の野望、渴望それに闘争といった最も基本的なものが反映するテーマをスポーツが見せてくれるという点にある」という立場からスポーツの内在的な分析が必要だと主張します。ジョン・アルト、マイケル・ノバック、ルース・ソウらを検討し、デービッド・ベスト（英国の哲学者）に従って、スポーツを芸術形式の一つ、つまりパフォーマンス・アートだと結論します。また、「達成」「正義」というベストが提案する概念を援用して、勝敗をめざして努力する競技者は、決して道徳的・美学的な何かをスポーツに求めているのではないのだと言います。

加えて、「スポーツは、社会的正義のモデルであるばかりでなく、共同や自立のモデルでもある。この点については、芸術形式としてのスポーツは別の重要な生活問題をすでにドラマに仕立てあげている。つまり、人間の努力の総ての基礎にある共同というテーマである」と、行き過ぎた「個人主義」に悩む米国社会への警鐘ともいえる発言もしています。

最後に、「スポーツは、人々総ての生活に基本的な問題をドラマティック且つ人々に受け入れられる方法で象徴的に表現する。これが芸術形式としてのスポーツの特徴であると我々は考える。それが、今日の成功と広範なアピール性をもたらした理由である」と結んでいます。

この報告をきいて、筆者は少し困ったなと思いました。私の心を映すかの様に、鈴木文明さん（拓殖大学北海道短大）は、「少し前に、私たち体育人が言っていたような内容で、気はずかしい感じがします」と言われたのが印象的でした。私は、これまでのご夫妻の研究を、特にトリニダード・トバゴのバスケットボール・コミュニティをR・ウィリアムスの「自由文化空間」(Open Cultural Space)を援用して評価する姿勢に、「楽観的」すぎると評したことがありました（Sport and Social Change in the Japanese Rural Community, IRSS Vol. 28 2/3, 1993）。今回の報告にも同様の感想を持ったことは否めません。しかし、彼らの主張は確かに根拠のあるものでもありますし、民衆文化を評価するカルチュラル・スタディーズの基本的な姿勢と通底するものもあるように思います。しかし、P・ウィリスが見事に実証したように、民衆が自らの尊厳をかけて独自の文化を創り上げる日常的な営為が保守的階級文化を温存してしまうという主張を忘れてはならないでしょう。

それでもなお、私はマンデル夫妻に惹かれてしまいます。鶴見俊輔の「限界芸術」論や柳宗悦・柳田国男に学んだ美学出身の社会学者有賀喜左衛門の業績、今和次郎の考現学、吉見俊哉の運動会研究などを思い起して、報告を聞きながら複雑な思いでボンヤリしておりました。また、私が山形県高島町の有機農業運動の研究を始めた15年前、企業も政府も一瞥だにできなかった「オープン・スペース」には今や様々な力が入り込んで、「有機農業」は一大産業化した観があります。当時、学会でも政府機関でも一笑にふされていた私たちの研究は、今では学会大会のメインテーマにすらなっていました（「村落社会研手学会」1996年10月 山形大学）。確かに、初期の有機農業運動は「自由文化空間」でした。

現実に近いところでスポーツの可能性を考えていきたいと思います。遠回りではありますが、自らの位置を自覚しつつ、「民衆」概念との距離を計りつつモノグラフを書いていけたらと思います。夫妻のキーノートの後のシンポジウムで「現代スポーツに希望はあるのか？」と演壇の先生方に投げかけた質問は、まさしく自分に問いかけたものでした。

（文責：筑波大学 松村和則）

4. 一般発表 <第1日（3月28日）第1会場>

岡田光弘氏（筑波大学大学院）：サッカーのルールにしたがうということ 一解説における表象作業のエスノメソドロジー

岡田氏は、スポーツが「何よりもまずルールと結びついた活動である」とするP. ウィンチの規定をとりあげ、そのルールが会員どうしの相互干渉によってどのように作りだされ、どのように変化しつつ完成されてゆくかのダイナミクスをN. エリアスの「フィギュレーション」概念を使って検証しようとする。そして、その結論的命題として「(われわれは) 日常社会の中で自明な状況を刻々と生産、再生産しつつ、進んでそのような有意義な秩序にしたがう」のだというH. ガーフィンの「優先性ルール」を導入する。氏はその一例として、競技しつつあるサッカーチームの相互行動とコミュニケーション、それを説明するスポーツ解説者の行為を問題にする。

氏によれば、スポーツアナが、ブラウン管画面にえがくチョークボードの白線も、そのようなエスノメソドロディカルな解明手段の例である。つまり、このアナの解説によって、今まで素人には見えなかったディフェンス勢、アタック勢の合目的な一斉行動の秩序が明示される。ここには「サッカーの、ルールブックには書かれていない」（岡田氏）いわば「上位のルール」（池井の補足的言い換え）が、存在するのであり、そのことはスポーツ専門家の解説によって、はじめて明らかになる。

岡田氏の発表は、席上、池井も弁護したように、ゴール直前の状況を秩序生成の現場に見立て、パーソンズ以来の課題「社会秩序はどのようにして生まれ、維持されるか」を比喩的に語ろうとしたものと考えることができる。その意欲とアイデアは大いに評価される、が、サッカーの「ルール」と、ここで氏のいう「ルール」とは明らかに違うものであり、会場での質問と反論もそのような混同に集中した。「規範性」（氏が実際に使ったターム）や「秩序」と言い換えれば、反論をかわせるかも知れないが、そうすると「秩序の遊び」の中のルールと、社会秩序としてのルールとの関係を明示しなければ議論が噛み合わない。いずれにせよ、理事会の延長に起因する時間切れは、たいへん残念であった。

清水 論氏（筑波大学）：体操する身体 一日本人的身体技法とそれを作ったネットワーク

清水氏は綿密な資料収集と、その慎重な追跡方法によって、明治政府が人民に課した体操教育が、けっきょく体制側の望むディシプリン好きの国民を作り上げていった経過を明らかにしようとする。勿論そのコースは単純ではなくて、輸入先のそれぞれのヨーロッパ近代国家のタイプ、体操理論の種類、輸入者のパーソナリティと、それらに反発する日本古来の一主に武道家の一身体観、適用されるインスティテュートと、その背景にある政治家や企業家のおもわく、体育家どうしの派閥争い等々、によって複雑な経過をたどる。氏はそのような経緯解明の有力な盤として、この歴史

に参加した人びとの個人史の発掘、「人的ネットワークからの解明が」重要であるとする。

近代的自由獲得のための政策が、しばしば、制度的拘束つまり「不自由」の力を借りる、というパラドクスは、つとに指摘されてきたところだが、氏はそれを、わが国の具体的な教育制度、なかんずく、文部省→師範学校→小学校→体操教育の流れにそって証明しようとする。日本国近代化の下部構造は「富国強兵」でなければならず、近代的「一等国」の政治的理念は「万機公論に決する民主主義でなければならない。明治政府のアンティノミーは、後者の部分を完全に切りすてて、太平洋戦争までもちこされることになる。その原因は、一般に注目されるイデオロギーの力よりも、身体性に、つまり、さまざま紆余曲折 一たとえば文部省/陸軍省、あるいは加納治五郎/永井道明、デンマーク体操/スウェーデン体操等々の対立一 があったにせよ、究極のところ「規律ヲ守ルノ習慣ヲ養フ」体操教育（明治24、小学校教則大綱、第11条）の力にあつた。A. グラムシ、M. フーコーの構想に依拠した氏の追跡はたいへん興味深い。

清水氏の発表も、用意された詳しい資料の説明のためもあって、大幅な時間不足に悩まされた。二三の質問も十分展開されぬまま終った。中でも特に「わが国古来の身体技法に接ぎ木される西欧近代の身体技法」といった重層的側面にも注目すべきだという吉田氏（追手門大）の指摘は、ゆっくり討議さるべき課題であつただけに惜しまれる。

さて、両氏の報告は一見、無関係に見えて、どちらも身体を經由する「秩序形成」の一その、双方向への一 追跡という点で興味深いものであつた。つまり、岡田氏の場合は未来へ向かつての、つまり、秩序形成の際に見られる「パノプティコン」過程の検証であり、清水氏のそれは過去の、つまり、出来上がってしまった「文明化過程」の遡及と言えるからである。

（文責：池井 望<井上 俊氏、本務校公用のため司会代行>）

松田恵示氏（大手前女子大学）：「身体の他者性と『間』としての遊び：スポーツにおける脱身体の社会学を目指して」

加藤朋之氏（筑波大学大学院）：「『サッカー』の誕生：身体活動の『型』と『フォーメーション』から」

身体論盛行の折から、スポーツ社会学とは社会学理論なるものがある特定の現象領域（スポーツと呼ばれるもの）に適用することであるのか、それともこの現象領域に関心を持つものが、これに関わることを通して社会学理論とはなにであるかを考察することであるのか、どちらなのだろうかと考えてみる必要があると思われる。

私見では明らかに後者であつて、前者ではない。社会学に限らず社会科学（広義には科学全体）に、そのような都合のよい理論なるものは存在しない。前者をとれば、ミクロ経済理論家が株で儲けられず、マクロ経済理論家がバブルの形成と崩壊に無力なのと同じことになる。なぜこうなるのかを、第2回大会シンポジウムで亀山佳明会員が「社会学は近代の所産である」という一語で解明した。いいかえれば、社会学とは近代社会の成立とともに開始された知の考古学的堆積物なのである。その点では経済学に負けず劣らずである。もし近代社会が病んでいるならば、社会学に可能なことも2つしかありえない。病者の冷静透明な自己洞察か、または魔術師の加療行為のたぐいか、である。

松田恵示会員は、かねて社会学が身体というカテゴリーを射程に納めえないのはなぜかに、正当にも疑問を呈しつつつけてきた。当日の報告で、同会員は「自己言及」という問題を通してこの疑問に回答を与えるところまで接近した。氏のレジュメにも述べてある。スポーツが身体活動だという命題が意味を持つことは、「身体という要素が行為に対して持つ自己言及的な形式を……巧妙に非自己言及的な形式へと擬制することによって可能となる」と。不可避なる自己言及とは、まぎれも

ない近代社会の病状告白である。上記の表現は、私たちはこのような状態の中でしか生きられなくなったという究極の病状告白そのものである。それならば氏ができることは、いつどのような事情が働いてこうなったのかを冷静に洞察し、記述することではないのだろうか。凡百の社会学者が提唱するコミュニケーションなどは、病者同士のいたわり合いではありえても解決ではありえない。副題が示すように、氏はこの状態からの脱出を「遊び」に託したいようである。気持ちは理解するが、これほど深刻な「死に至る病」の告白の後でそんなことが可能だろうか。

加藤朋之会員の報告は、一言でいえば蹴鞠とサッカーの比較の試みである。こうした試みは有意義であり、大いになされる必要がある。サッカーが東京高等師範学校を中心とする学校教育システムを通じて拡大したこと、その過程の中で他者との配置を監視する「長」の目の内面化ともいべき事実が定着したこと、などの興味深い指摘が見られた。ただし、比較はなにをどのような目的で比較するかが明らかでない場合には効果的にならない。明言が避けられたが、氏は暗に「型」を蹴鞠に、「フォーメーション」をサッカーに擬しているように感じられた。両者が何を指し、どのような意味で比較に値するのかが最後まで明瞭でなかった。会場の会員から、同じ鞠を蹴るという身体活動をとつても、日本古来のものと西洋化されたものとで重心位置が画然と異なることに注目すべきであろうという指摘がなされたのも、比較の視点に関わる提言であつたと考えられる。

（文責：法政大学 平野秀秋）

<第2会場>

水上博司氏（三重大学）：体育専攻学生の潜在的離脱意識に関する一考察

水上氏は、体育専攻学生の学校運動部からの潜在離脱意識を、一般大学生と比較するとともに、主に過去のスポーツ（集団）経験に焦点を当て、統計的手法のもとに考察された。

体育専攻学生の集団離脱意識は特に大学一年時において一般大学生と比べてかなり強いということ、また小学校期・中学校期・高校期それぞれにおける種目別の比較においては個人種目よりも集団種目を選んだ者のほうが大学入学時により離脱傾向が強いこと、小学校時に遊びの中でスポーツ経験をした者よりもスポーツ少年団に属していた者のほうが離脱意識が強い、などの指摘がなされた（聞き間違えでなければ）。そして、大学生におけるスポーツ参加の多様化と個人化の傾向やスポーツ選択種目の変更の傾向が示された。

私の感想としては、離脱意識は集団からの離脱の実態を写すものではないけれども、体育専攻学生の大学運動部への所属の自明性が揺らいでいる時代を示すデータであるようにも思えた。大学運動部の風土がどのように変化するのか、あるいは体育専攻学生の意識が一種目偏重のスポーツ型とより（保健）体育志向型との間でどのような志向に向かうのか、興味深いところである。

現在の行為や意識は、過去の影響とともに未来の目標からも影響を受けるであろう。水上氏は体育専攻学生の将来の不安についても触れられたけれども、今回は過去の影響をより強調されたように感じられた。潜在的離脱意識の研究を通して、より背後の大きな問題が解明されることを期待したい。

白石義郎氏（久留米大学）：福岡ユニバーシアード大会の研究（2）－学生の大会としてのユニバーシアード－

福岡ユニバーシアード大会に関する大学生の意識調査（関心度、印象度、支援活動）の報告がな

された。特に、支援活動を行った体育学部生と一般学生とでは、まなざしに異なるものがあることが示された。つまり、体育学部生は競技のレベルや外国選手に興味を寄せがちであるのに対して、一般学生では国際性や話題性に興味を示しがちであったということだ。また、学生の意識を通して、福岡市や組織委員会の意図がどのように実現あるいは実現されなかったのかということが示された。この点に関しては、交流的な参加や文化交流をも含めた総体としてのユニバーシアードというコンセプトの認知には至らず、学生の意識はミニ五輪的なものとしてとらえることに向けられ、一般観客のレベルに留まるにすぎないというふうに指摘された。

スペクテイター化したスポーツの運命は、観る楽しみをどれだけ喚起するのかということに求められるのかもしれない。

前回に続く報告であり、報告書を読むかぎり前回は大会主催側の意図を言説分析によって示そうとされたのに対して、今回は学生の意識という別の角度から研究対象に接近されたようである。

思うに、発表要旨に示された問題意識としての文化的・社会的基盤や現実構築は、具体的な諸部分のもとに全体的な一般性に至るものなのではないだろうか。その点においては、いまだ全体像が明らかにされないように思われた。

水平方向の広がりとともに、表層から深層への深まりが、今後の研究においてより明確に示されるのであろう。

(文責：愛媛大学 桐田克利)

前田和司氏（北海道教育大学旭川分校）：「天塩川流域におけるカヌー・クラブ・

ネットワークの成立」は、地域の自然・社会・文化に根ざした内在的な運動実践のあり方を、北海道カナディアン・カヌー・クラブを中心とする天塩川流域住民のカヌー・クラブの「水平方向のネットワーク」の形成過程に焦点をあてて明らかにした「モノグラフ研究」であった。対象となったクラブは、地域を下部組織として従属させる「協会」や「連盟」のような垂直方向の支配関係を否定し、地域の個性を生かした多様なアイデアを形成し、実験していた。既製品ではない「手作りの」カヌーによる協力体制の樹立である。発表は、従来のテクノロジー化し高度化したスポーツが持っているグローバリズムと集権主義を批判し、自然・歴史・文化の独自性を生かした内発的な地域づくりにカヌーがどれだけの意義を有し得るのかというパースペクティブのもと、スライドを利用しながら、天塩川流域の概要（位置、人口および産業）、天塩川流域におけるカヌー・クラブの成立（北海道カナディアン・カヌー・クラブの成立、各地域クラブの成立）、カヌー・クラブの実践、北海道カナディアン・カヌー・クラブと地域クラブの関係、まとめ：地域の多様性とカヌー・クラブ・ネットワーク、という展開でなされた。結論として、北海道カナディアン・カヌー・クラブを筆頭とする「地域文化」を重視した個性的で多様な実践活動と「ゆるやかな関係性」を保つ「水平方向へのネットワーク」戦略によって確実な成果があげられつつあることが明らかにされた。主な議論としては、こうした「モノグラフ研究」の社会学における位置づけをめぐる問題と「水平方向へのネットワーク」の概念に関する問題等があった。魅力的な研究のパースペクティブと「根っこ」のある方法であるだけに、30分という時間ではとうてい議論しきれぬ内容のものではなく、今後の進展が期待される。北海道はカナダに似た風土をもつが、カヌーの「目の高さ」は日常の生活とは異なったグローバリズムを持ち得るであろうし、風土・歴史・文化・社会の「地域性」はむしろその土着性（多様性）故にグローバルであるといった議論も成立しよう。また、「水平方向へのネットワークづくり」といった戦略（アイデア）は、「柔らかな個人主義」を想起させる未解決の問題を含む概念であり、全体を通じて、「個性」と「普遍性」を越えた「アイデンティティ」といった興味をひくテーマを感じさせてくれた。

浅川重俊氏（筑波大学大学院）：「相撲社会を構成する人的ネットワークに関する研

究：『タニマチ』のネットワークを中心に」は、これまでのようにスポーツ集団や社会を限定された文化をもつ世界といった枠組みの中で理解するのではなく、社会との「現実的な」相互関係を重視したスポーツ社会学をめざして、特に、相撲社会の「タニマチ」（それは、華族や政財界の実力者といった政治的・経済的に大きな影響力を持つ外部社会の人々によって構成されている日本プロ相撲の支援組織体である）に着目し、そのネットワークの実態を分析することによって、相撲社会が全体社会とは遊離した閉鎖的な特殊集団・社会ではなく、「隠れた」政治・経済的な現実的な社会内のネットワークの一部を構成していることを明らかにしようとした文献・事例研究であった。発表では、はじめに（研究の動機とパースペクティブ）、先行研究の検討（主体的個人の関係性に関する視点の欠如、「ネットワーク」分析の有効性）、「ターミナル」としての平沼亮三の人的ネットワーク分析（慶應野球部・小泉信三・早稲田・講道館・天狗倶楽部・貴族院・スポーツ団体の人的ネットワークの分析、平沼亮三・安部磯雄・小泉信三・針重敬喜・嘉納治五郎・押川清・岸 清一・戦前の有名スポーツマンなどのネットワーク分析など）と展開することによって、「相撲社会を観念的な世界から解き放ち、現実社会の一部としての拡張性と重層性をもつ相撲社会のネットワーク」の解明を試みた。主な議論としては、相撲社会の支援組織体としての「タニマチ」の妥当性の問題と「ネットワーク分析」の有効性に関する問題等があった。新しい方法論と史実に基づいたウラ分析であるだけに、興味深い議論が活発に行われたし、氏自らの今後の課題をも含めて、こうした人的ネットワークの背後にある「教育の二重構造」や彼らの存在を正当化する共通の「アイデンティティ」といった問題を想起させてくれた期待できる研究であった。

(文責：茨城大学 日下裕弘)

<第2日（3月29日）第1会場>

上羅 廣氏（上野学園大学）：「テニス技術の再考：身体視座からのアプローチ」

上羅氏は、本題の発表に入る前に少し感情をこめた口調で、次のような内容のことを言われた。身体論という内容について、かなり前の学会で発表されたこと、しかしその時は全くといってよいほど反応がなかったこと、今回、身体論についての発表を頼まれたこと、であった。いわゆる発表のタイミング次第でアピール効果があったりなかったりは情けない（科学的普遍性を求めると言うことからするとタイミング次第というのは情けないという意味）気持ちもするが研究者業界からすればやむを得ない現実であり、私なりに上羅氏の口調を読んで、流行に振り回されるスポーツ社会学へのシビアな批判として受けとめさせてもらった（違っていたら、ごめんなさい）。

発表の詳しい内容は、1994年に出された上野学園創立90周年記念論文集に論文として収められている（当日、コピーで配布される）。内容はテニスの歴史も含め多岐にわたるが、例えばデカラケやコートのサーフェイスの進歩によりストロークの技術や身体動作に著しい変化が生じたという。身体論風に言うと、「延長身体としてのラケット革新」であるという。またそのラケット革新が一流技術を一般化し指導するという体系を崩し、「身体性の一部を必ずしも必要としなくなる」ケースが生ずるという。なるほど、小生も学生時代はテニス部主将をやったがその身体の癖ならぬ口癖は、「おしてうてえ」であったなあ、木製のラケットの時代は。また身体論風にテニスのゲームをなぞれば、それは勝ち負けというよりコミュニケーションの空間であるという。かのキング夫人だったか、そんなことを言っていたなあ。

いずれにしても当日会場にいた人々の中にはテニス、ソフトテニスOBが何人かおり、一言二言もの申したかったようであるが、時間切れに終わった。小生の感想としては、こういう現場、現実、現物の素材を扱う理論化をおおいにやって欲しい。文献の紹介風の発表は沢山、うんざりである。そういう意味でテニスという個別のテーマにアプローチするという試みに賛成である。テニス社会学を作り上げ、先行き不安のクラブや学校のコーチや指導者にとりちからみずになる研究成果を上げ、アピールして頂きたいとテニスOBとして失礼に当たりますが申し上げます。どうぞよろしくお願い致します。

藤田紀昭氏（日本福祉大学）：「身体障害者のスポーツ社会化研究視点」

研究者のテーマ継続のキャリアパターンからすると、藤田氏の社会化研究は揺らぐことなく持続している。特に文献は漏れなく押さえられているようで、氏の発表を通して私などは日頃の勉強不足を痛感させられることが多い。今回は、スポーツ社会化の研究対象を身体障害者に合わせ、未着手の身体障害者の社会化研究のための視点を提示された。

- (一) 身体障害者のスポーツ社会化研究の基本は、これまでの社会化研究の延長線上にある。
- (二) 方法論としては、構造機能主義的方法論と相互作用のアプローチの結合の試みが、またその弁証論的結合が有効である。
- (三) 社会的コンテキスト、権力の取得と使用、相互作用の相互過程などの視点から社会化過程を理解することが有効である。

当日は、海外の学者の文献のうち、表やモデル化されたものを中心に説明された。「なるほど、なるほど」と聞いているしかないというのが実情である（勉強不足であるから仕方がないのである）。身体障害者のスポーツ社会化研究に特に必要なものは何かと聞きたくするのが人情というものであるが、「個人的属性理解が重要であることから個人史の利用が有効」という。それに関しては、当日配布された資料のラストのページに表化されている。

いずれにしても今回は枠組みの提示といった発表であった。所属されている大学の性格からすると、氏が新たに引き上げた身体障害者のスポーツ社会化研究は非常に重要なテーマではないだろうか。勝手に推察申し上げてしまう。広島県のテニス大会で全国で初めて、一般のトーナメントに車椅子のプレイヤーが出場し話題をよんだ。ホノルルマラソンに行った人が感動するのは、レースのタイプに区別がないこと、また自らが車椅子のスポーツマンの編集長が専門誌「ACTIVE JAPAN」を創刊し、身体障害者のスポーツ界に元気を注入しつつある。

毒舌家で知られた安田三郎先生は何年か広島大学総合科学部におられ（私もそこに在籍していた）、ゲームの理論化をしようとされていた頃なのか、テニスコートの脇にあった汚い小生の研究室に何度も来られ、スポーツのゲームの話聞いて帰られたことを思い出す（当時、広大に社会学研究会があり、私その頃「コートの外」という空間論を唱え始めその研究会で発表、「面白い」と言って下さったのがお話しできるきっかけであった。すいません、自慢話までして）。車椅子に一度のってテニスをやるとその難しさがよく分かる。その難しさに敢えて挑むプレイヤーやランナーのホンネのホンネは何だろう。文献をにらみつつ、体育教師ならではのヒアリングやアンケートをまとめられ、関係者が元気がでるような提案をして下さることを切に期待いたします。

（文責：広島市立大学 荒井貞光）

については、かつてのメディア研究においても指摘されてきたが、インターネットの普及にともなって、よりいっそうの重要性が増してきたわけである。

以上の両氏の発表にたいして、会場からは、単なる現場報告にすぎないのではないか、との批判が寄せられた。これにたいして、次ぎのような意見も出された。お二人に共通しているのは、今までに手のつけられていない、いわば新領域の開拓の必要性の指摘であり、かつまた、そこに果敢に挑もうとするチャレンジ精神とそれを可能とする若さである。若手研究者による新しい試みととらえて、今後の進展にきたいしたい、というものである。

（文責：龍谷大学 亀山佳明）

5. 大会運営担当者からの一言

近藤義忠（宮城教育大学）

全国に知られた花の名所のように「絢爛豪華」ではありませんが、仙台の青葉山に咲く桜にも捨てがたい風情があります。しかし、今年、心待ちにしていた花の季節はあつと言う間に過ぎ去ってしまいました。第5回大会の会場にさせていただいた宮城教育大学のキャンパスはいま萌え出る新緑の香りに包まれ、すでに初夏の気配すらうかがえます。

春の訪れが遅い東北の仙台で、しかも経験に乏しい小さな地方大学を会場にしての学会開催にはいろいろと不安もありましたが、予期した以上に大勢の方にご参加いただき、二日間にわたって学会大会を晴れがましく開催できましたことを幸福に思っています。この機会に、学会大会運営の大役をお与え下さり、充実したプログラムと多数の参加者によって地方大学での学会開催に花を添えて下さった各位のご好意に心からの御礼を申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

ところで、スポーツ社会学会の大会を仙台で開催させていただくことは、学会発足の時からのご願でした。40年前の東北大学で菅原 禮教授に体育・スポーツ社会学への眼を開かせていただき、さらに、故田原音和教授のご理解とお導きを支えにしてこの地に根を下ろした私が、恩師お二人へのささやかな「ご恩返し」と考えていたからです。

私の個人的な感傷が動機であったにもかかわらず、仙台近辺にいる4人の会員（東北大学の中島信博と市毛哲夫、仙台大学の丸山富雄、石巻専修大学の佐藤利明）が早々と学会大会の仙台招致に賛成し、その実現に向けて全面的な協力を約束してくれました。また、第5回大会を仙台で開催することを決定した昨年の理事会では、仙台ご出身の井上 俊前会長や、松村和則理事の強いご推薦があったともうかがっています。

勤務するところはそれぞれ離れているのですが、日頃の交流で互いに気心を知り合っていた上記の仲間と実行委員会を組織し、各自、思いつくまま自発的に役割を担当して開催準備に当たることになりました。5人の中では最も年嵩ということで、一応私が名目上の代表になり、作業の全体を統括するような立場に立たされました。しかし、その大役を果たすにはあらゆる面で未熟で、数々の不手際がいまだに愧たる思いをしています。

実行委員会といっても5人のメンバーだけで、しかも、どこからも財政的な援助が期待できない貧しい体制です。第5回大会はすべて「手づくり」をモットーに準備することにいたしました。時には理事会や事務局のご指導をいただきながら、また、過去4回のすばらしい大会運営を参考に、参加して下さる方に少しでもご満足いただける大会にすべく、各自が持っているものをすべて投入してがんばったのです。

＜第2会場＞

この部会の発表の内容を簡単に要約して報告しておく。

まず橋本政晴氏（筑波大学大学院）：「スポーツ番組制作のフィールドワーカー：

メディア・スポーツの新たな研究視角」について。氏は私たち現代人にとっていかにメディアが重要であるかを指摘する。このことはスポーツの領域においても例外ではない。そこでスポーツとメディアの関係にかんする先行研究を調べる。それは大きく分けて二つに分けられるだろう。すなわち「受け手の分析」と「内容分析（例えば記号論分析など）」である。そしてこの指摘に続いて、メディア・スポーツの生産過程についての研究がほとんど見当たらないと述べる。氏の研究意図はここにある。つまり実際の製作現場に入りこんで、フィールドワークをおこなってみることである。取り上げられるフィールドは二つある。一つは「スポーツ中継の生産過程」であり、もう一つは「スポーツ・ニュースの生産過程」である。

前者では、TV放送局がおこなうJリーグ・サッカーの実況中継の現場に入り、どのようにして中継がなされているか、を報告する。また後者では、同じくニュース番組において、ニュース・ソースとしてスポーツがいかにして製作されるのかを、その現場のリサーチにもとづいて報告する。これら両者の報告から得られた考察は次の二つである。

(1) メディア・スポーツの生産現場においては、メディア・テクノロジーの支配を受けざるをえないことである。また、そこには文章化されていない、いわば暗黙の技法マニュアルが存在しており、それによってそれぞれの番組に共通するパターンが生み出されて行くことである。

(2) 実際に中継や放送にかかわる担当者のスポーツ観やスポーツ経験についていえば、それらが番組制作に反映されることはほとんどなく、ともすれば視聴者の「ウケ」をねらった製作が行われかねないことである。

橋本氏のこの報告は実際のフィールドワークにもとづいたものであるために、十分に迫力にとんだ内容であったが、同時に次のような指摘も印象に残った。「彼らの現場に無知なままでメディア・スポーツを受容し、研究していくことの危うさを、そこに生きる彼らから教えてもらうことができた」と筆者は感じた。」

次に高橋義雄氏（東京大学大学院）：「インターネット（WWW）によるスポーツ情報の提供の事例研究」について。氏はインターネットについて無知な人達にも分かるように配慮されて、まず、インターネットとは何かから始まって、スポーツを情報の側面から研究する必要性が大きくなったことを指摘された。インターネットの機能として、(1) 電子メール (E-mail) 機能、(2) ニュースグループ機能、(3) ファイル転送 (FTP) 機能、(4) WWW機能をあげる。WWW機能とは「画像や音声を含むいわゆるマルチメディアファイルを提供するサーバ」のことである。この機能のために、国家機関の情報公開、企業の宣伝から個人の紹介にいたるまで、さまざまな情報の公開に利用されるのであるが、スポーツ情報においてもその例外ではない。そこで高橋氏は、WWW上で1995年3月より情報の提供を行っている2002年ワールドカップ日本招致委員会のホームページを事例に取り上げて、具体的な報告をおこなった。

ホームページへのアクセス数は毎月約2,000から3,000件にもなっていること、その内訳として、性別、年代別、職業別、地域別による分布が示された。ここに見られるように、スポーツはエンターテイメントとしての側面だけではなく、情報源としての側面が認められるのである。スポーツを情報として楽しむとは、たとえば観戦後に友人たちと情報を交換することなどである。こうした点

特別企画の公開フォーラムに関心を寄せた地方紙が、思いがけず大きな記事で宣伝の一翼を担ってくれましたが、学会大会のポスターも会場の看板もみなスタッフが手づくりで製作しました。昨年春、第5回大会の仙台開催が決定されて以来、今年の3月末に大会本番を迎え、過日ようやくその後片付けを完了するまで、5人で集まって相談し、ともに作業した回数は優に20回を超えています。

大会当日は、会場を提供した宮城教育大学の同僚や学生諸君、さらに私が支部長をつとめている日本体育学会宮城支部の会員にも動員をかけて、適材適所、大会の運営に協力していただきました。また、時宜にかなった学会大会の会場校にいただいた宮城教育大学当局からは、会場使用料等で国有財産管理の制度上可能な限りの配慮をして貰ったことも報告しておきたいと思います。

とまれ、第5回大会は幸運と天候に恵まれて無事終了しました。せっかくご参加下さったにもかかわらず、私どもの不行き届きのためにご迷惑をおかけしたことも多々あったのではないのでしょうか。深く反省してお詫び申し上げるとともに、今後のために忌憚のないご指摘とご指導がいただけることを切に望んでいます。会員の分布が疎らな東北地方は、スポーツ社会学の土壌として未開拓のところがたくさんあります。仙台での学会大会に地元から初参加し、改めてスポーツ社会学の研究に意欲をかき立てられたという若い研究者もいらっしやうです。今大会の運営を担当した私たちの仲間は、仙台での学会開催を契機に東北地方でのスポーツ社会学がさらに発展することを念願し、及ばずながらその先導役として働くことができると考えています。ご支援をお願いいたします。

6. 第5回学会大会参加記

大会参加記

木佐貫久代（奈良女子大学大学院）

＜てぶくろ＞

スポーツ社会学会の参加記を書かなくては思い出したのは、白い手袋をして道行く人々に愛想を振っているときだった。私は、うぐいす嬢として、史上最年少議員の誕生を待ち望んでいた。そういえば、うぐいす嬢も嬢であって、男性はいない。

初めての仙台は、3月末とは思えないほどの寒さだった。季節を先どることが関西人のつとめと考え薄着していた私は、コート置いてきてしまったことを後悔した。手袋やマフラーも欲しいくらいだった。行きのバスでは、前の車にぶつかるといった、前代未聞のハプニングが起き、15分も坂の上で待ちぼうけた。運転手さんの白い手袋は、帽子を取っておわびを告げた後、再びハンドルを握った。

何とかたどり着いた会場で、何かが違うといった居心地を初めて参加した大会に感じた。

ときは懇親会になって、先輩とふたりで徐々に壁ぎわに寄りながら、先生方が集う姿を見ていた。このおでんのお皿が手袋と手帳だったら壁の華だなど思いながら、居心地の原因を発見した。同性が少ないのだ。発表者も司会者も参加者も。女子大歴6年目の私にとっては、久々の感覚であった。

東京ドームの売り子が全員女性になるという。うぐいす嬢も学会も、これは適材適所なのだろう

か。ただ、木を見て森を見れていないだけなのだろうか。

4月の第3日曜日、大阪府の樂市で、日本一若い議員がだるまに目を入れることができた。やっばり、舞踏会には踊り子はもっと必要だ。そして、真っ白い私の手帳も、いっぱい文字で埋めてみたいと思った。

<ことば>

ことばという記号について改めて考えた。感情とことば、伝えたい事実とことばとの距離感と、ことばへの想いの込め方は、物を伝える温度になる。言霊があるとすれば、この温みによるものだろう。悪いことを話すと悪い霊が寄ってくるとは言いがて妙である。

ところで、学会発表という場には、どんな霊がやってくるのだろうか。雰囲気それが代弁するならば、発表者によって空気が違う。頷きの溜息や困惑の吐息、眠気の到来やクエスションの嵐。こういった何かしらの空気の動きが感じられるときは、温度が測定できる。ただ、温度が低い、高いの一元論ではなく、温度が感じられないときどきがある。これはたぶん、興味の問題ではなく、記号が記号の役割を遂行できていないためだろう。勉強不足もちろんこれに拍車をかけているが、動きのない空気や温度のない無機物からうまく有機物は吸収できない。

第5回大会には悪い言霊はいなかった。温度の変化も感じられた。これからは、どんどん伝える物に温度がない時期になってくる。渡る世間に鬼でもいたほうがましかもしれない。

Jリーグの行方・雑考

梅津頭一郎（呉大学社会情報学部）

私の専門はコミュニケーション論であり、最近では情報化社会論やメディア論に足を突っ込んでいく。自分の専門と当学会との接点として、目下のところメディアを媒介としたスポーツ文化に関心がある。そういった意味で、初日のシンポジウムにおける地元仙台の、プロサッカーチーム設立への熱っぽい応援ぶりには感動した。

他方、私が強く再認識したことは、メディアの中の「Jリーグ」と地域にとっての「Jリーグ」の本質的な違いであった。地域の熱気あふれる応援歌にもかかわらず、最近のメディア風景においてサッカーの影が薄くなっていることは明らかである。たしかにサポーターの熱狂ぶりを見る限り、Jリーグは未だ健在であるようだ。とは言うものの、TV視聴率やスポーツ紙の扱いなどにある種の退潮現象が見られることも事実である。1993年当時の、プロ野球をはじめとする既存スポーツ界をあっと言わせたあの興奮ぶりからすれば、現在の状況は明らかに「冷めている」といわざるを得ないのではないだろうか。

あるいはJリーグ発足当初の狙いを考えれば、この「冷め方」は、過剰ぎみとも言えたブームが一段落したものにすぎず、取るにたらないと考える向きもあるかもしれない。しかしこれまでメディアが仕掛けとなって盛り上がった数々のスポーツ文化のその後を鑑みた場合、果たしてこの先Jリーグが順当にやっばいけるのか、一抹の不安が頭をよぎるのである。現に80年代以降、ブームを過ぎたメディア・スポーツ文化の多くは大衆文化の表舞台から姿を消し、少なからずオタク化へ向かったように思われる。プロレス然り、F1然りである。

周知のように、80年代、高度情報化の進展と消費文化の成熟のもとで、文化現象の非・実体的記

号（＝シミュラークル）化が、マーケッターや一部の社会学者達によって議論された。当時の論調としては、オリジナルコピー図式の消滅やコピーの自立、記号的差異化としての新しい能動性の獲得等、かなりポジティブな捉え方がされていたように思う。この時代、メディア・スポーツもまた、ある側面においてこの脈絡にあったと言える。例えば、プロレスが漫才のネタにされたり、あるいはプロ野球版NG集ともいべき珍プレー好プレー番組が視聴者の支持を受けたりといった現象は、まさにこれにあたる。

今日、若者文化などの消費文化の研究者のなかには、既に差異化というスタイルが陳腐化したと言う者も少なくない。しかし問題なのは、80年代当時の議論の多くにおいては、その理論的下敷きとなったボードリヤールの「白ミサ」の議論は捨象されていた、ということである。ボードリヤールは記号的差異化の行き着く果てに社会的コンテクストの消滅を見ていた。年々加速度を増す流行現象の短期化とタコ壺化・局所化をみるにつけ、ボードリヤールが70年代当時に予言した「白ミサ」状況がいよいよやってきたように思えてならない。

話をJリーグに戻そう。メディア文化としてのサッカーが文化現象の非・実体的記号（＝シミュラークル）化の脈絡でとらえられるものであるとすれば、今後タコ壺化・局所化し、オタク文化へと向かう可能性は否定できまい。とすれば、「地域」と「オタク」というある種矛盾する土俵に立つこととなる。その場合、Jリーグは先行の流行メディア・スポーツ同様、オタク文化へと向かうのであろうか、それともあくまで地域スポーツの道を貫くのか。おそらく多くの関係者があくまで地域の人々のためのものであるべきだと考えているはずである。しかしながら、状況は厳しいのではないか。

最近スポーツ観戦の在り方について「スタジアム型」と「メディア型」ということが言われている。私見だが、サポーターをスタジアム型とメディア型とに分けて捉えた場合、スタジアム型サポーターの存在は、Jリーグの今後を考える重要な決定要因になってくるように思われる。

一般に言われるように、スポーツやコンサート等におけるオーディエンスは、直接的に相互のコミュニケーションをとることはないが、場面に応じ、互いに響振するものである。

スタジアム型サポーターの場合、様々なパフォーマンスを行い、しかも空間的に限定されることによって、プレイする選手をも巻き込み響振はますます強調されていく。血湧き肉踊る共感性の空間が出現するのである。それはもはやスポーツ観戦の領域を超えた、アイデンティティ形成の共同作業と言っていってもいいかもしれない。

また、コミュニケーション論的に見るならば、こうした熱狂的響振型のコミュニケーションは、極めて心地よい空間を作り出す。というのも、ここでは熱狂しあうことが中心概念となり、意味的な問いや解釈は存在しなくなるのだ。従って、サポーター達は互いの人格の深い領域に入り込むこともなく、連帯意識を確認しあうことが可能となる。これはまさに今日若い世代に見るコミュニケーションスタイルそのものであるとともに、ある種の共同体意識の体現でもあろう。むしろ地域社会という枠組みからははずれるが……。

地域共同体の崩壊が叫ばれる今日、サッカークラブによるコミュニティづくりというプランは確かにロマンを感じさせるものがある。しかしより重要なことは、ライブスポーツの在り方が変わってきていることであり、その先端にJリーグのサポーター達がいるという現実ではないだろうか。彼等のある種マニアックではあるが熱狂的なエネルギーをうまく取り込みながら、Jリーグの今後の在り方を考えてゆくべきであろう。

「アトランタ五輪まであと〇〇日」!

坂上康博 (福島大学行政社会学部)

「みなさん、よろしくごさいます」。8才のわが家の娘は、小学校でこんなあいさつをしてしまい、みんなから笑われてしまった、という。日本に帰国してから4日目、転校生としてはじめて登校したその日の出来事だった。それから数日後、今度は、「学校でね、私すごく浣腸(緊張!)したっちゃ」。さらに、朝起きてきて髪の毛を手でおさえながら、「お母さん、寝グソ(ぐせ!)ついちゃった」。

いやはや、2年間の英国生活というのはやっぱり長かった、ということを感じ知らされる。ぼくはぼくで、帰国した翌日にさっそく出勤したのだが、8階建ての学部棟を前にして、なんと自分の研究室が何階だったのか思い出せない。なんということか。これは、2階を「ファースト・フロア」と呼ぶ英国の習慣、そして1階がまるで地下室のような建物の構造、この2つによって自分の頭が混乱してしまったためだった。というのはあとから必死で考えた言い訳で、とにかく信じられないほどたくさんのことを忘れてしまっていた。さらに久々にみた日本式の腰をまげるお辞儀の仕方や日本人のうつむきかげんの視線などにも、どうも違和感を感じてしまった。要するに小さなカルチャーショックというやつなのだろう。

ということは、それだけ2年間、英国の生活や文化にどっぷりとつかってきたということ、あるいはまた、自分のやりたいことに集中できたということなのだろう。何人かの人からは「たっぷり充電できたでしょ」と言われる。それにたいして「いやー、放電も大きかったですよ。なんせ英国は240ボルトですから」等とわけがわからぬ言葉がつい反射的に出てしまう。「充電」という言葉をぼくの体が拒否してしまうのは、2年間とにかくがむしゃらに過ごしたという思いが強いからだと思う。

アエロフロート機に家族3人で乗り込み、17時間かかってロンドンに到着したのが1994年の3月末。それから約1年は、拙稿「英国近代スポーツ史像の再構成 - 留学9ヶ月目の中間的報告 -」(『現代スポーツ研究』第1号、1995年)で紹介したように、受入れ教官であるウォーリック大学社会史研究所のトニー・メイソンのアドバイスのもとに、英国の近代スポーツ史に関する基本文献 - このなかにはジョン・ハーグリーブスやジェニファー・ハーグリーブスの著書も含まれている - をひたすら読むという生活を送った(*以前この会報で紹介したサッカー観戦の方は、言うまでもなくその後ますますのめり込んでしまったが、これについては今回は残念ながら省略)。

そして2年目は、一転して、自分がこれまでやってきた日本近代のスポーツ史に立ち返ることになってしまった。理由はまったく外在的なもので、とある出版社から突然著書をまとめてみないか、という話があり、この誘いにのってしまったためである。簡単にのったわけではない。英国におけるスポーツ研究に接して新鮮な刺激を受け、さまざまな興味をかきたてられて、よしこれから、という矢先のなんともタイミングの悪いこのリクエストにずいぶん悩んだ。まったく信じられないようなありがたい話だが、自分にとってこれは、走り出そうとしたとたん後ろへ引き戻されたような、そんな後ろ向きの仕事ではないか、せっかく英国にいてなんでいまさら……。しかし、編集者のYさんの誘いはさすがで、拙稿「国民統合装置としてのスポーツ - 1928~32年を中心に -」

(『歴史学研究』1991年8月号)を読んで、「明治から現在までのスポーツと権力(政治)の関係」というテーマをぼくに突きつけてきた。それは、学生時代にモスクワ五輪ボイコットなどいくつかの事件を目の当たりにし、そうした政治的事件にたいする怒りをエネルギー源にしながら、こだわりつづけてきた自分自身の研究テーマそのものだった。やはり、逃げるわけにはいかない。「こんな依頼、一生ないわよ」と妻から言われ、トニー・メイソンからは、「どちらかではなくて英国と日本の両方ともやればいいじゃないか。今は時間がたつぷりあるだろう」と励まされ、決意を固めた次第である。Yさんはその後、吉見俊哉「運動会の思想 - 明治日本と祝祭文化 -」(『思想』1994年11月号)のコピーを送ってくれたりしながら、ぼくを叱咤激励してくれた。

さて、いざ取りかかってみると、たたまち頭のなかで本の構想がふくれあがり收拾がつかなくなってしまう。そしてそんな混沌とした状況からどうにか抜け出すためにまず考えたのが、(1)スポーツ祭典と政治的儀礼との結合による国民統合、(2)国際大会を通してのナショナルプライドの強化とその誇示、政治的制裁、(3)スポーツの倫理と国家道徳の結合を通じた国民教化、(4)「阿片」「安全弁」としての利用、といった国家権力によるスポーツの利用形態の類型化だった。そして、これらを軸に近現代日本におけるスポーツと権力の関係を通史的に描く、比較史的な考察も交えながら、というのが最初のプランだったが、これは2ヶ月ほどで挫折した。英国にいてはいかんともしがたい資料的な限界がその第1の理由。第2には、広く浅い教科書風のものはいくらでも、それよりは対象をせまく限定してそれを深く掘り下げるというスタイルの方がいい、少なくともその方がぼくの性にあっていうこと。

さらに、なんだかんだと数ヶ月悩んで、今度は、視点を国家権力との関連だけに限定せず、スポーツの社会的文化的な意味をできるだけ深く広く読み取る、という方向に修正することにした。この修正は、ぼくにはまだ理論的な整理ができていないのだが、「権力」概念の拡大ということになるのかもしれない。今のところ、第1章は、明治期の一高野球部を中心にした「ベーズぼーの精神史」、第2章は、大日本武徳会という統轄組織の軌跡に焦点づけた「武道の社会史」、第3章は、昭和初期のスポーツへ国民的関心の高まりと国家政策の展開をあつかった「『スポーツ狂時代』の政治学」、という3章立てプランを考え、エピローグで戦後の状況について簡単にスケッチしてみようかと思っている。単にスポーツという文化がもつ政治的な力を暴露するだけに終わりにたくない、私たちの自由の歴史的な位相をスポーツという領域から考えてみたい、等などさまざまな思いがあるが、実証的なレベルでこれらをやっつけることは至難の技である。

結局、半分ほど草稿を書いて帰国となり、その後はほとんど進展なし。にもかかわらず、アトランタ五輪までに原稿を書き上げる、という目標はまだ捨てていない(不可能なのはわかっているが)。オリンピックに出場する選手たちのように、彼、彼女らとともに全力を尽して7月19日を迎えてみたいという、そんなスポーツ心(?)からである。だから、テレビや新聞でよく見る「アトランタ五輪まであと〇〇日」というあのカウントダウンは、特別な意味を持ってぼくにせまってくる(アトランタ五輪の自分流の楽しみ方!)。3月には4年ぶりにスポーツ社会学会に参加し、なつかしい方々との再会、魅力的な方々との出会いがあった。帰国して早や2ヶ月が過ぎようとしている。娘の日本語の上達ぶりをみながら、よし、そろそろエンジン全開でがんばらねば、と思う。

「タッチ3」を見て泣けますか

高橋豪仁（徳島文理大学短期大学部）

第5回日本スポーツ社会学会の一般発表「スポーツ番組制作のフィールドワーク」で橋本政晴氏は、メディア・スポーツの生産現場ではディレクターが思い込む視聴者の「ウケ」を想定した番組制作が行われていることを示された。では、この視聴者の「ウケ」とは何だろうか。スペクテイター・スポーツのどこが、人々にウケるのだろうか。

実を言うと、広島県出身の私は、どちらかと言えばカーブのファンである。今まで見たゲームの中で一番印象的なシーンは、忘れもしない1979年11月4日、日本シリーズ、近鉄対広島、3勝3敗で迎えた第7戦、私が高校2年生の時だった。その日はテレビ中継を見ていた。4対3で広島が1点リードした9回の裏、近鉄の攻撃はノーアウト満塁。マウンド上には7回からリリーフした江夏がいた。代打佐々木を三振にして1アウト。スクイズをはずし、3塁ランナーをタッチアウトにして2アウト。そして、バッター石綿を三振に仕留めて試合終了。このシーンは、亀山氏が「スタジアムの詩学」（『スポーツの社会学』世界思想社）で論じられた深いプレイに相当するものであろう。私の身体図式を示す線とプレーヤーたちの身体図式を示す線が、ゲームの進行に伴って大きくなり、流れていったために、テレビを見ていた私は、手に汗を握って、ハラハラドキドキした。多くの名場面は、見る人が選手のプレイに自らの保有する身体図式を重ね合わせるという身体リズムの再現によって、その面白さが説明されると思う。

2・3年前に、たまたまテレビで映画「タッチ3」（昭和62年制作、原作：あだち充）を見た。アニメーションではあるが、ゲーム場面では前述の日本シリーズのゲームと同様にハラハラドキドキしながら見た。しかしながら「タッチ3」では、「ハラハラドキドキ」とは質の異なる「胸にジーンと来る感動」も味わった。場面は甲子園への出場権を賭けた地方予選の決勝戦、甲子園のヒーロー新田のいる須見工vs.明青学園。8回まで3対5で須見工が2点リードしていた。9回表、明青は相手のエラーなどで同点に追いつき、更に10回の表に上杉のタイムリーヒットで1点勝ち越す。そして10回の裏、この回を押さえれば、明青は甲子園に行ける。須見工の攻撃は1番から始まる。1番打者を三振に捕るが、2番打者に2ベースヒットを許す。3番打者をピッチャーライナーに押さえ、2アウト、ランナー2塁で4番新田を迎える。明青ナインはマウンドに集まる。上杉（ピッチャー）「ここは敬遠だろうな。1塁も空いていることだし。次の打者は料理しやすい大熊。誰かからとってアウトは1つだろ。よしくぞ大熊勝負、文句なし。」明青ナインは守備につく。キャッチャー松平「ショート、サードに寄れ。外野、バック。あと1人締まっていこうぜ」と指示を出し、勝負させる。上杉「1人くらい頭のいい奴がいてもよさそうなのに」とつぶやく。新田、バッターボックスで松平に「礼を言うぜ」松平「そんな筋合いはございません。こうなる運命なんです」と答える。上杉は全力投球し、新田はヒット性のファールを8本打つ。上杉「腕が重てえよ。家帰って風呂入って眠りてえよ。こういうセリフが昔は簡単に言えたのに。」スタンドの応援の音が消え、画面は無音となる。上杉「静かだ。今から敬遠しても次の打者に投げる力は残っていいえ。南」～投球動作に入る～「ごめんな」～投球し、画面はスローモーション。ゆっくりとボールはキャッチャーミットへ入る。「ストライク、バッターアウト」試合終了。

この高校野球を題材とした野球アニメはフィクションであるが、この敬遠というモチーフに関連する本当にあった出来事もある。でも、現実には映画のように旨くない。1992年8月16日、全国高校野球選手権大会7日目、星稜（石川）-明徳義塾（高知）戦で、大会随一の強打者である星稜の松井選手に対して、明徳義塾は5打席とも敬遠の作戦をとり、2対3で勝利した。1回、3回、5回は走者がいたが、2アウト無走者の7回も敬遠した。1点を追う9回表の星稜の攻撃、2アウト

3塁で松井選手が5度目の打席に立つと、スタンドから「勝負、勝負」の大合唱が起こった。敬遠後、星稜の3塁側アルプススタンドからメガホンがグラウンドに投げ込まれた。また、明徳義塾の校旗掲揚の際には、整列した明徳の選手に対してスタンドから「帰れ、帰れ」の声が沸き起こった。明徳義塾の河野投手は松井選手に対して1球もストライクを投げず、外角へ大きく外れる20球を投げただけだった。試合後のインタビューで馬淵監督（明徳義塾）は「高知県の代表として初戦で負けるわけにはいかなかった」と語った。

「タッチ」と「松井選手」の事例は、敬遠しないで堂々と戦うことが勝利することよりも重要なのだというメッセージを発しており、見る者はそのメッセージを違和感なく受け入れるメタ・コードをすでに持っていると考えられる。見るスポーツにおいて、おそらく競争性は不可欠な要素であろう。しかし、人々はスポーツで勝利を追求することを当然視しつつも、それを越える語り（ナラティブ）を求めているのかもしれない。

もしも、明徳義塾のピッチャーが、9回2アウト3塁の時に松井を敬遠せずに勝負し、ゲームに勝ったとしても、「タッチ」で表現されたドラマ性にはかなわないと思う。「タッチ」の場合、10回2アウト2塁で4番新田を迎えた時、マウンドに集まったナインは、ピッチャー上杉の「新田は敬遠」という言葉に同意して守備につく。しかしキャッチャー松平が勝負のための守備位置を野手に指示すると、野手も喜んでこれに従った。ここで、見ている者は感動する。なぜ感動してしまうのか。それは、ここに「価値の転換」があるからだ。木下順二は、カタルシスを価値の転換としてとらえる。「オイディプス王は、留針を自分の目に何度も突き立て盲目になり、放浪の旅に出る。…肉眼を失うことによって、王位に在った頃より遥かに高い視野がオイディプスの内に開けた。王位に在る時は何よりも大切であったもの、地位、人間関係、財政問題その他その他がさっと遠のいて行った代わりに、人間の本質、あるべき姿、不条理をも時に背負いこまねばならぬことのある人間の運命、その他その他が暗黒の視野の中に見えてくるという、もう一つの高い次元の世界にオイディプスが出るのができた。そういう“価値の転換”をオイディプスと共に観客も認識し、自分自身にとっての“価値の転換”とは何かを観客が考えるところに、『オイディプス』というドラマの～一般にドラマというもの～“カタルシス”の本質はあるのだろうと私は考えます」（『“劇的”とは』岩波新書）

「タッチ」のこの場面は、松田氏らによると「目的-手段」図式的行為の範疇に分類される部分である（『漫画『タッチ』に現れた『遊』概念の二重性』スポーツ社会学研究、第2巻）。甲子園出場を目標にして、倒れる程の猛練習をし、迎えた地方予選の決勝戦である。どうしても勝たなくてはならない場面である。勝つためには、新田を敬遠すべきである。しかしこの土壇場になって、勝利を至上とする価値が崩れ、敬遠して試合に勝つよりも、たとえ負ける確率が大きくても真つ向勝負の方が有意義であるという価値の転換がなされる。ここに、見ている者を感動させるストーリーの組み立てがあると思う。

スポーツ映画の場合には、このような劇的なストーリーの構成が可能であろう（スポーツ映画については、清水 諭「スポーツ映像論 -野球をテーマとした映画の構造分析-」日本体育学会第40回大会）。それに対して、テレビ中継を含めて実際のスポーツ観戦の場合、見る人を楽しませてくれるのは、プレーヤーの人並み外れた身体的パフォーマンスと、均衡する2つの勢力がぶつかり合うことによるハラハラドキドキの競争状況ではないかと思う。私などは、プロ野球の好プレー珍プレー特集が好きだし、ひいきチームが勝った夜はスポーツニュースのはしごをすることもある。勝った負けに拘る私は、質の低い只のスポーツ消費者ではないかと反省する。プレーヤーの放つオーラの見えるスペクテイターになれるよう、審美眼を養わなくてはと思う（中澤 眞「Jリーグのクオリティとスペクテイター」ロアジール、第18巻第8号）。

前田博子（鹿屋体育大学）

18歳人口の急増期が過ぎ、今後ひたすら子どもの数は減少する。だが、日本の大学進学率はまだ50%にも遠く、少子化社会が即受験生の減少につながるとは言えない。大学が魅力的な場所でありさえすれば大学の繁栄は今後も続くだろう。そんな情勢を背景に文部省が各大学に自己点検・自己評価を求め、大学改革を推進してきたのは当然の成りゆきであろう。さらに、大学側は受験生の増加時期に貰った臨時定員をどうするかという問題も抱えている。そこで多くの大学が取り組んだのは、これまでも根強い不要論のあった教養部を廃止し、定員を伴う新たな専門課程を作ることであった。個人的には大学の教養不要論に疑問を感じているが、流れは充分理解できる。

鹿屋体育大学でも議論の結果、昨年度から教養関連の講座であった「社会文化学講座」を廃止し、代わって「生涯スポーツ学講座」が発足した。鹿屋の講座は教官の配置であり学生の定員には直接関わらないので、実質的にはこれまで「体育学講座」と「体育経営管理学講座」に分かれて配属されていたスポーツ社会学系の教官が主として新講座に集まり、教養系の教官が近い分野の講座に割り振られたということである。現在私が所属する生涯スポーツ学講座ができた大まかな経緯はこのようなところである。

大学改革に伴って生まれた新たな分野の名称は「国際」「情報」「環境」が御三家と言われている。それは幅広い研究分野を取り込むことが可能という便宜上の問題と、今後成長する分野という判断からであろうが、流行りの観を免れない。体育の世界では「生涯スポーツ」が今後流行りそうな雲行きである。ところで、「生涯スポーツ」とは何だろう。新講座でまず最初に取り組んだのがこのテーマである。そして一年が経った今言えるのは、この言葉に対する認識には幅がある、ということだろう。

そうは言っても「継続」した「スポーツ（身体）活動」という一致した大枠はあり、その継続の見方や活動の内容、活動の目的、意識などに幅があるのだ。例えば継続とは個人的縦断的にみる立場と、世代的横断的にみる立場がある。また、活動内容も個人が活動にフィットしていくのか活動を個人にフィットさせていくのか、すなわちその年齢での現状に併せた活動を選んでいくのか、選んだ種目をその年齢に併せた活動に変えていくのかということもある。さらに、健康との関わりについても目的なのか付随的なのかということにも見解に幅が見られる。これらの解釈が徐々に整理統合されてはいくが、一点に集約されることはないだろう。

生涯スポーツは社会的事実として観察することが出来る。現在におけるスポーツは一部の人々だけの活動ではなく、すべての世代、様々な階層・社会的地位、男女両性が参加する活動となっている。また、政策としてスポーツ振興は意義あるものとされ、多くの人々が活動できるような、また活動させるような行政の働きかけがある。ところで、多くの人を巻き込む政策ということになると、スポーツにこれまで消極的であった人々が対象になりやすい。さらに活動内容もこれまでのものより親しみやすいものを取り上げることになり、これまで親しまれてきている競技スポーツは取り上げられにくい。

私は「生涯スポーツ」を個人史的な視点から見ていこうとしている。学齢期からの継続という見方をすると、競技スポーツとされる種目が対象になることが多い。そのような立場から、最近取り組み始めた研究をご紹介したい。まだ手始めの段階なので、自分自身への励みを込めたつぶやき程度にとつて下さい。

鹿児島市の北西部にある樋脇町は人口約8,500、第一次産業従事者率24.1%（うち農業従事者率22.5

%）、70歳以上の高齢者率16.6%であり、地理的には鹿児島市から約30km離れているが、車で1時間足らずの距離である。また、20分程度の距離に人口約72,000の川内市がある。

樋脇町は「温泉とホッケーの町」を自称する。町役場の職員の名刺にもこの言葉が見られ、封筒のロゴには言葉と共にステックを持ったホッケー選手の絵が描かれている。フィールドホッケーはポピュラーな種目とは言えないが、歴史のあるイングランドスポーツのひとつである。オリンピックには1908年の第4回ロンドン大会から採用され、現在ではワールドカップも開かれている。日本は1932年のロサンゼルス・オリンピックで2位になったという記録が残っている。国内では1923年から男子の、1933年からは女子にも全日本選手権大会が行われており、戦後の第一回大会（1946年）から国体種目に採用されている。

樋脇町に最初にホッケーが導入されたのは1951年、樋脇高校の正課体育においてである。その後男子高校生の部活動として競技選手が育つ場が生まれ、1962年からは全国大会に出場、1970年には全日本高校選手権大会で優勝するに至っている。このような背景から、1972年の鹿児島国体では町がホッケー会場となった。先の「温泉とホッケーの町」という言葉はこの国体を機に使われるようになったのであるが、会場運営に参加した母親年代の女性にホッケーに親しむ機会が生じたという点が「町技」となる重要な要因であったといえよう。国体後「樋脇ママさんホッケークラブ」が誕生し、町内12地区対抗の家庭婦人ホッケー大会を毎年開催するほどの広まりを見せ、全日本家庭婦人ホッケー大会には1973年の第一回大会から連続出場、過去22回中16回優勝という華々しい成績である。

「ホッケーの町」という言葉から考えられる町の現状は、多くの町民が現在ホッケーをしているということである。その「多く」とは数だけではなく幅広い層の人々、すなわち学齢期の青少年だけでなく成人、高齢者の男女両性が活動しているということである。ホッケーの樋脇町という予備知識だけをもって、まず資料収集と概要の説明を受けに町役場に出向いた。そこで分かったのが前述した華々しいこれまでの競技成績であった。ところが、同時に予想外の事実も教えられた。ホッケーをしているのは大会で活躍する周辺の層だけであり、それ以外の町民はほとんど参加していないのである。現在チームとして活動しているのは、1) 樋脇ホッケースポーツ少年団、2) 樋脇中学男女ホッケー部、3) 樋脇高校男女ホッケー部、4) ハチマンクラブ（樋脇高校卒業生で成る選手18名のクラブチーム）、5) 樋脇ママさんホッケークラブであり、選手として活躍する以外のメンバーを巻き込んだ場合は、家庭婦人対象の地区対抗町内大会とそれに向けたホッケー教室だけである。40年に近い歴史を持つ樋脇高校のこれまでに活躍してきた選手はどうしているのだろうか。また、20年以上前から家庭婦人への普及が見られながら、高校生の女子チームが結成されたのはほんの3年前なのはなぜなのだろうか。競技選手として活動してきた者には競技スポーツは継続する対象とはならないのだろうか。中年からの競技者の活躍は若年者の競技選手の出現には機能しないのだろうか。これらの疑問を持って、しばらくこの場に入らせてもらおうと計画しているところである。

会員の出版物紹介

日本スポーツ文化の源流 成立期におけるわが国のスポーツ制度に関する研究
—その形態および特性を中心に—

日下裕弘 著 不味堂出版

序文

目次

第1章 研究の方法

- 1 先行研究の検討と研究手順
- 2 スポーツ文化の制度論的枠組み
 - (1) 制度の概念
 - 1) 文化としての制度
 - 2) 制度の基本的性格
 - 3) 制度化の過程
 - 4) 制度の構成要素
 - (2) スポーツ制度のモデル

第2章 日本スポーツ文化の発展

第1節 スポーツ組織

- 1 一時的な楽しみを求める遊戯仲間（スポーツの紹介、移入）
- 2 「常連」なるものが現れ、一応の顔ぶれがそろった同好のインフォーマル・チームの出現（幼稚なゲーム）
- 3 校友会組織の一部としてのフォーマルな「運動部」の誕生と発展
- 4 試合のための連合組織の発生
 - (1) 定期戦のための連合組織の発生
 - (2) リーグ戦および大会のための連合組織の発生とスポーツ集団の増加
 - 1) 野球
 - 2) 軟式庭球
 - 3) 漕艇
- 5 各種競技連盟（協会）の設立、および、全国的な大会の開催による組織の発展
- 6 わが国におけるスポーツ組織の確立
- 7 まとめ

第2節 スポーツ・ルールゲームのルールを中心に

- 1 ルールの日本への紹介
- 2 慣習的ルール
 - 1) 野球
 - 2) フットボール
 - 3) 軟式庭球
- 3 統一ルールの作成とその精密化
 - 1) 野球ルールの統一と精密化
 - 2) 漕艇ルールの統一と精密化
 - 3) ラグビー・ルールの統一と精密化
 - 4) 軟式庭球ルールの統一と精密化
- 4 ルールの公認と普及
- 5 まとめ

第3節 スポーツ技術と練習形態—野球を事例に—

- 1 群雄割拠時代の野球技術、練習形態
 - (1) 一高時代の野球技術、練習形態
 - (2) 早慶時代以降の野球技術、練習形態
- 2 まとめ

第4節 スポーツの文物（物的条件）—用具と施設を中心に—

- 1 野球
 - 1) グラウンド
 - 2) ボール
 - 3) バット
 - 4) ミット・グラブ
 - 5) ユニフォーム
- 2 テニス
 - 1) 軟式のゴム球
 - 2) 硬式ボール
 - 3) ラケット
 - 4) ガット
 - 5) 服装
 - 6) コート・ネット・支柱など
- 3 まとめ

第5節 スポーツ・イデオロギー

- 1 ハイカラ連のプライド・スポーツ
- 2 担い手のスポーツ信条—勝利至上主義と修養・鍛錬主義—
 - 1) 野球信条
 - 2) 軟式庭球信条
 - 3) 漕艇信条
 - 4) ラグビー信条
 - 5) まとめ
- 3 スポーツ・イデオロギー
 - (1) スポーツ・イデオロギーの事例Ⅰ：各種スポーツ協会
 - (2) スポーツ・イデオロギーの事例Ⅱ：OB達のスポーツ信念
 - 1) 押川春浪のスポーツ信念
 - 2) 飛田穂洲（忠順）のスポーツ（野球）信念
 - 3) 針重敬喜のスポーツ信念
 - 4) 橋戸頑鉄（信）のスポーツ信念
 - 5) 香山蕃のスポーツ信念
 - 6) 高瀬養のスポーツ信念
 - 7) 平沼亮三のスポーツ信念
 - 8) 岡部平太のスポーツ信念
 - 9) 織田幹雄のスポーツ信念
 - (3) スポーツ・イデオロギーの事例Ⅲ：スポーツ雑誌に現れたスポーツ信念
 - 1) 「運動界」にみられるスポーツ信念
 - 2) 「運動世界」にみられるスポーツ信念
 - 3) 「スポーツマン」にみられるスポーツ信念
 - 4) 「アスレテックス」にみられるスポーツ信念
- 4 まとめ

第6節 総括

- 1 日本スポーツ文化の発展段階
- 2 外来スポーツの「和魂洋才」的摂取

第3章 わが国におけるスポーツ制度の確立

- 1 成立過程にみられる内的連関
- 2 組織による統制のメカニズム

第4章 日本スポーツ文化の発展要因

第1節 内的・主観的要因：日本スポーツ文化の原動力—担い手の夢中・上昇志向・競争意識—

- 1 一般社会人とスポーツ
- 2 学生とスポーツ
- 3 まとめ

第2節 外的・客観的要因：スポーツ制度の外的連関—教育制度とスポーツ制度—

- 1 森有礼の教育観、および教育勅語
- 2 文部省とスポーツ制度
- 3 大学・高専とスポーツ制度
 - 1) 早稲田大学（安部磯雄）の場合
 - 2) 慶應義塾（小泉信三）の場合
 - 3) 専門学校と校長たち
- 4 旧制高校とスポーツ制度
- 5 旧制中学・実業学校とスポーツ制度
野球害毒論争 甲子園野球 スポーツ集団の受け皿としての旧制中学・実業学校の増加
- 6 師範学校とスポーツ制度
嘉納治五郎のスポーツ信念 野口源三郎のスポーツ信念 大谷武一のスポーツ信念
- 7 まとめ
 - (1) 教育イデオロギーとスポーツ・イデオロギー
 - (2) 受け皿としての学校の増加とスポーツ集団

結章 日本スポーツ文化の源流とアイデンティティ

索引

あとがき

※ 出版物の紹介を希望される会員の方は、事務局までご一報ください。

編集後記

日本スポーツ社会学会会報の第14号をお届けいたします。今回は第5回学会大会の報告などで、いつもよりボリュームのある会報となりました（すぐに印刷費のことを考えてしまうのは、裕福さとは無縁のためでしょうか）。ご多忙中原稿をお寄せくださった会員の皆様、有り難うございました。

学会大会報告にもありますように、第5回大会は1日半という短い期間の中で、シンポジウムに公開フォーラム、二つのキーノートスピーチと一般発表、総会、懇親会をこなすという贅沢な大会でした。近藤先生をはじめとする東北地区の会員の皆様のご尽力に対して、感謝申し上げたいと思います。また、編集委員会のご努力により、本学会の研究誌『スポーツ社会学研究』は、第4巻より市販化が実現いたしました。さらに、研究委員会では、かなり規模の大きい国際シンポジウムの企画を立案中だとも伺っております。本学会が、こうした各種委員会の多大な犠牲のうえに成り立っていることを認識し、関係者に感謝しながら与えられた仕事に取り組んでいきたいものです。本年度もよろしくお願いいたします。

(Yamanori)

日本スポーツ社会学会会報 第14号

発行：日本スポーツ社会学会事務局

〒816 福岡県春日市春日公園6丁目1番地
九州大学健康科学センター内
Tel/Fax :092-583-7847(西村)
092-583-7855(山本)
092-583-7856(吉田)
E-mail: yamamoto@ihs.kyushu-u.ac.jp
GHE00164@niftyserve.or.jp

郵便振替口座番号：00390-0-43962
加入者名：日本スポーツ社会学会事務局

ジャネット・リーヴァー著 亀山佳明・西山けい子訳

サッカー狂の社会学

ブラジルの社会とスポーツ

現代社会において、観戦型スポーツが有するアピール力や文化的意味を、ブラジルとサッカーとを軸にアメリカ人女性研究者が読み解く

四六判/322頁/2300円

近刊

「フロー理論」として知られる楽しさや喜びの理論を構築し、「意識の自己統制」をキー概念として明快な答えと実践の指針を示した名著

M・チクセントミハイ著 今村浩明訳

フロー体験—喜びの現象学

杉本厚夫著

スポーツ文化の変容
現代社会における文化装置としてのスポーツを多様な視点から考察し読み解いた意欲的労作

亀山佳明編

スポーツの社会学
プロ野球、マラソン、ゴルフ、相撲等を通して、新たな視点からスポーツの「意味」をさぐる

江刺正吾・小椋博編

高校野球の社会学
●甲子園を読む 文化社会学的な視点から高校野球を考察し、甲子園「神話」の深層に迫る

森下伸也著

ユーマアの社会学
自我の彼方へひとを誘う宇宙的笑いをめざして、生命の根源へとさかのぼる新時代のユーマア論

片桐雅隆著

プライベートの社会学
●相互行為・自己・プライベートの相互行為モデルを提唱する直し、プライベートの相互行為モデルを提唱する

小玉美恵子・人間文化研究会編

美女のイメージ
＜美女＞はどう語られてきたか。社会が付与するイメージから、女性と社会との関係を読み解く

井上眞理子・大村英昭編

ファミリズムの再発見
現代日本の家族における自立と依存の絡み合いを軸に、ファミリズムの意義を再検討する

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56
TEL075(721)6506<税込定価>

スポーツ産業とは何かを体系的に明らかにする!

スポーツ産業論

●松田義幸 著

スポーツ産業はいかにあるべきか——この課題に対応する標準的なテキストとして最適の書。

[主要目次] 第I部—スポーツ産業の市場構造 第II部—スポーツ産業の市場行動(1) 第III部—スポーツ産業の市場行動(2) 第IV部—スポーツ産業の公共政策 第V部—スポーツ産業の個別市場分析



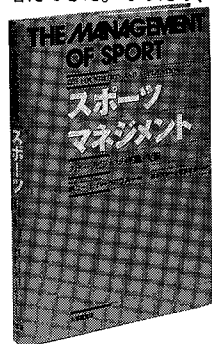
●A5判・上製・280頁 定価2,369円

スポーツ・マネジメント

●ボニー・パークハウス 編著

●日本スポーツ産業学会 監訳

社会の中でスポーツの役割や機能が増すにつれ、スポーツを商品とするビジネス的側面が急速に増えてきた。そのため、専門的なビジネス・マネジメントの手法をスポーツ領域でも確立する必要があり、スポーツ分野の会計と予算、経済学、法律、コミュニケーション、マーケティング、経営管理、倫理問題など、その研究と実践を集めて理論と応用の両面から記述した先駆的な書。



●B5判・上製・296頁 定価3,605円

歴史の目で日本的スポーツの「いま」を問う!

日本的スポーツ環境批判

●中村敏雄 著

社会とともにスポーツもまた激しく変化・変貌する今日、〈スポーツ環境学〉の必要性を提唱しつつ、あるべき「部活」への構図をすべく描く。

●四六判・258頁 定価1,957円

〈スポーツ界の鬼才が放つ待望の書!〉

スポーツフィールドノート

●松浪健四郎 著

スポーツ界の鬼才が日本スポーツの深層に迫る。その筆法は鋭いがスポーツを愛する著者の真情が読むものを打つ。「体育科教育」連載中から1冊にまとめられることが待ち望まれていた快著。

[主要目次]

- I “タレント教授”奮戦記
- II 格闘技通信
- III スポーツ人類学への招待
- IV 国際化時代のスポーツ文化
- V 現代スポーツの死角 ほか



●四六判・192頁 定価1,399円

企業・スポーツ・自然

—株式会社ニッポンのスポーツ

等々力賢治 著

スポーツが政治や企業に利用されていることを排し、人々の生活を豊かな文化として発展することを願う立場から日本スポーツの在り方を問い直す。

●四六判・274頁 定価2,080円

現代社会とスポーツ

Sport in Society

P.C.マッキントッシュ 著
寺島善一・岡尾恵市・森川貞夫 編訳

スポーツ発祥の地イギリスの土壌にたつ著者の広く深い洞察により、スポーツと政治、余暇、アマとプロ等の問題が鋭く抉られていく。

●A5判・240頁 定価1,800円

スペクテイタースポーツ

—20世紀アメリカスポーツの軌跡

ベンジャミン・レイダー 著
川口智久 監訳・平井 肇 訳

多くのスポーツヒーローを輩出させた1920年代から、スペクテイタースポーツ(見るスポーツ)主流の1980年代に至るアメリカスポーツの社会史。

●A5判・282頁 定価2,575円

大修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 [書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください] ▶Tel.03-5999-5434 Fax.03-5999-5435